

～紀の国森づくり基金シンポジウム～

森林をまもり森林をいかす



日時

平成20年 3月 20日 (木)

場所

和歌山県勤労福祉会館
プラザホープ

和歌山市北出島1丁目5番47号 TEL.073-425-3335
(ビッグホエール 北隣り)

主催：和歌山県

■ 開 演

司会 皆様、お待たせいたしました。本日は足元のお悪い中、又年度末の大変お忙しい中、ようこそおいで下さいましてありがとうございます。ただ今より、森林をまもり森林をいかす～紀の国森づくり基金シンポジウム～を始めさせていただきます。

本日司会を務めさせていただきますのは、テレビ和歌山アナウンサーの笠野衣美と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、開会の前にいくつかご来場の皆さまにお願いを申し上げます。本会場内は禁煙となっております。喫煙の際は会場の外の所定の位置でお願い致します。又、携帯電話は電源をお切りになって頂きますか、マナーモードにして下さいます様、お願い申し上げます。

そして本日、皆さまのお手元にアンケート用紙をご用意させて頂いております。こちらのアンケート用紙は、シンポジウムの終了後に出口で回収させていただきます。会場出口には鉛筆もご用意しておりますので、どうぞご協力をよろしくお願い申し上げます。

それではまず、開会に先立ちまして、主催者であります和歌山県を代表して和歌山県農林水産部技監中野雅光よりご挨拶を申し上げます。

中野 皆さんこんにちは。

今日は紀の国森づくり基金シンポジウムと言う事で開催致しました所、お天気の模様ももうひとつなのですが、この様にたくさんご参加頂きましてありがとうございます。県では去年の4月から県民の紀の国森づくり基金活用事業という事で実施してございます。

19年度の取り組みとしましては、主に県民の方々からの公募による事業を中心に実施しました。内容につきましては、子供さん達に山での森林整備を体験して頂いて、木材の利用なんかも勉強して頂くと言う様な取り組みとか、あるいは、里山の再生と言う様な取り組みなど、色々な取り組みを数多く県内各地で実施して頂きました。

その模様はテレビや新聞でも多数報道して頂きまして、皆さんにもご覧頂いたかなと思います。また来年度引き続き取り組む訳ですが、すでに本年度を上回る応募を頂いてございます。

和歌山県は昔から木の国と言われております様に、森林が77%で大変な森林県でございます。ただ、お手元の資料にも入っております様に、森林につきましては、水をきれいにするとか、あるいは洪水を防止する等々、大きな役割を持っている訳ですが、案外皆さんご存じない中で日々そういうものが我々の生活に直結しているという事になってございます。

ところが今の県内の森林の現状は、色々な事情があるのですが手入れが行き届かないで荒廃しつつある森林も増えて来てございます。

条例が施行されて約1年経っておる訳でございますけども、もう一度本日のシンポジウム等を契機にして、もう一度森林の役割とか、我々の生活への関わり等について、更に深く知って頂いて、県民の皆様方に、直接的、主体的に更に森づくりに取り組んで頂くきっかけになればという事で、本日シンポジウムを開催致しました。

今日は講師の先生方に、初めにまずスギ花粉症の話について、治療、研究の第一人者でい

らっしゃいます榎本雅夫先生のお話、それから国の林政審議会委員で全国の森づくり活動などを取材、またテレビなどでもご活躍頂いてございます、青山佳世様にご講演を頂く事になってございます。

その後引き続き、紀の国森づくり基金運営委員会の委員長をお願いしてございます和歌山大学の橋本卓爾先生にコーディネーターをお願い致しまして、青山佳世さん、それから実際に県内各地で森づくりに取り組んで頂きました上野大雄さん、それから白水節二さん、そういった活動を現地の方でお世話頂いた原見知子さん、それから森林林業に携わっておられます野村義夫さん、これらの皆様方にご参加頂いて、和歌山らしい森づくりについてディスカッションして頂く事になってございます。講師の先生方にはどうぞよろしくお願い申し上げます。

この紀の国森づくり基金の活動の様子は、今月の30日にテレビ和歌山の「紀の国21」で、特集番組として放映される事になってございますので、ご近所等お知り合いの方々にもお知らせ頂いて是非ご覧頂きたいと思えます。

本日のシンポジウムが、何とか今後の皆様方の森づくりへの取り組みへのきっかけとなる様な、実りのあるシンポジウムになる事をお願い申し上げまして、簡単でございますが開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。今日はどうもありがとうございます。

司会 和歌山県農林水産部技監中野雅光でございました。

司会 それではプログラムを進めて参ります。

ただ今から、日本赤十字社和歌山医療センター耳鼻咽喉科部長榎本雅夫先生に研究報告をして頂きます。榎本部長のプロフィールをご紹介させていただきます。

榎本先生は日本の花粉症研究の第一人者として活躍されていらっしゃいます、日本アレルギー学会評議員も勤めていらっしゃいます。現在は日本赤十字社和歌山医療センター耳鼻咽喉科部長として勤務なさっていらっしゃいます。又、4月からは鳥取大学客員教授に就任されます。本日のテーマは今年のスギ花粉症とその対策です。

それでは、榎本先生、よろしくお願い申し上げます。

■ 研究報告

■「今年のスギ花粉症とその対策」えのもと ただお 榎本 雅夫 氏

日本赤十字社和歌山医療センター耳鼻咽喉科部長



榎本 ただ今ご紹介に預かりました榎本でございます。本日は今年のスギ花粉症とその対策というお話をしてみたいと思います。

今丁度スギの花粉が飛んでいる真最中でございまして、こういった風景が和歌山の山でも見られます。花粉雲と言いまして、まるで雲の様に花粉がたなびいていると言う風景でございます。

花粉症と言いますとスギの花粉症だけが有名でございますが、日本で報告されている花粉症は約60種ございます。和歌山では除虫菊の花粉症が有名でございますし、又、紀南の方に行きますと、梅の花粉症でありますとか、そういった和歌山特有の花粉症がございます。

何と言いましてもスギの花粉症が日本では非常に多い、という事でスギの花粉症が有名でございます。スギの花粉症になりますと反復性のくしゃみの発作でありますとか、あるいは水性鼻汁、あるいは鼻づまりなどが起こって参ります。又、鼻のかゆみも頻発でございます。それに目のかゆみというのがございます。又、あるいは涙が出てきたり、あるいはのどの症状が出たり、ひどいのに参りますとゼーゼーいったりする喘鳴でありますとか、喘息の起こってくる場合もございまして、又、花粉を飲み込みますので、消化器症状が起こってくるという症状がございます。

それでは花粉症はどうして起こってくるのかという事につきまして、少し勉強してみたいと思います。私達がスギの花粉を吸いますと、スギに対する抗体、スギ特異的 IgE 抗体と私達がいいますが、こういった抗体が出来て参ります。この抗体が出来ますと、私達の目や鼻にありません。肥満細胞という細胞がございますけれども、その周りにこう言う風にくつつく訳ですね。こう言う風にくつついた状態を私達の言葉で「感作が成立した」と言います。

もう一度スギの花粉がやって参りますと、このIgE 抗体とスギの花粉とが反応致しまして、この肥満細胞の中からヒスタミンでありますとか、ロイコトリエンといった化学伝達物質が出て参ります。特にヒスタミンであります。このヒスタミンは、私達の鼻とか目にあります。知覚神経の末端を刺激しまして、くしゃみが起こってくる。それから、こういった刺激によるくしゃみ発作によりまして、中枢の神経系が興奮致しまして、鼻汁が出て参ります。又、あるいは直接こういった化学伝達物質は血管に働いて、血管の浮腫とかあるいは充血なんかを起こしまして、鼻づまりが起こってくるという事で、くしゃみ、水鼻、鼻づまりといった症状が起こって参ります。

こういったスギに対する特異的な IgE 抗体が体に出来たかどうかという事を調べるには、皮

膚試験という試験がございます。この皮膚にこの様に、これらの花粉とか、あるいはダニなんかのエキスを打ってやりますと、それに対する IgE 抗体が出来ている場合には赤くなる訳ですね。

この人はスギに対しても赤くなりますし、家のほこり、ハウスダストに対しましても赤くなりますし、ダニに対しても赤くなる。つまりこれらの物に対して、IgE 抗体を持っているという事になって診断がつけられる訳です。最近では血液を用いてこういった物を調べる検査も発達して参っております。

何と言いましても先程言いました様に、スギの花粉があつて私達の体の中にIgE 抗体が出来て、又スギの花粉がやって来てスギ花粉症というのが起こる訳ですから、いかに私達の空中にスギの花粉が飛んでいるかを調べる事が大切です。調べ方と致しましては、ダーラム型の花粉捕集器というのがございまして、スライドガラスにワセリンを塗りまして、ここに落ちてくる花粉を毎日観測してやる方法と、空中に含まれるスギの花粉をリアルタイムモニターと言いまして、こういった自動観測器で測ってやるという方法がございます。

私達は1985年からこういった物を病院の屋上に取り付けまして、又和歌山県におきます各地の病院の屋上に取り付けまして、仲間達と一緒に観測して参りました。それが和歌山・泉南花粉研究会という研究会を立ち上げてやってきた訳であります。近畿圏一円の、こういった同じ研究をしているグループと組みまして、近畿花粉情報センターとしまして、現在近畿各地の花粉の情報を伝えております。又、NPO花粉情報センターと言いまして、日本中の花粉の情報をお知らせしている組織がございますけども、この組織にも繋がりをまして、又環境省がリアルタイム情報というのを通称「はなこさん」というのでやっていますけども、これにも結びついていてという流れがございまして、今テレビ、新聞で色々な情報が流れていますけども、こういった所から流れているというシステムになっています。

スギの木にどれぐらいの花粉があるかという事を少しお話してみますけども、スギのユウカ、雄花ですが、この一粒の中におよそ1万3千2百個のスギの花粉が含まれています。一つの、このブドウの房みたいになっている所には、約40万個の花粉が含まれていますし、一つの枝には4000万個、一本の木にはおよそ20億個の花粉があると、膨大な数が報告されています。

今年は何れぐらい飛ぶのかという事で、スギの花粉症が発症する人が多くなったり、あるいは症状が重くなったり致しますけども、これは私達の予報でございますけども、今年も泉南の方は去年よりもずいぶん多い様ですが、和歌山市では1.26倍、御坊では昨年並み、紀南の方では去年よりも少し少ないだろう、と言う予想が出ています。又、スギで花粉症の起こす人はヒノキでも起こす場合がございます。と言いますのは、スギの花粉とヒノキの花粉にアレルギーを起こしてくる同じ様な物質が含まれているという事で、ヒノキに関しましては去年よりもずいぶん沢山の花粉が飛ぶであろう、と予想されております。

例えば、大阪の南の方では約6倍、それから和歌山では1.6倍、紀南の方にいきましても、2倍位の飛散量があるだろうという事で、今年の花粉症というのは、この様なヒノキの花粉が飛び終わる4月の連休前くらいまではかなり続くのではなかろうか、と言う風に予想しております。

これが、私達が1985年から泉佐野、橋本、和歌山、御坊、田辺、新宮で計って参りました花粉の変動でございますけども、阪神大震災のあった年の1995年には全国的に、こんなに

たくさん花粉が飛びました。今年は去年と大体同じぐらいではなかろうか、というのが私達の予想でございます。

花粉症といいますと、どうやって治療するのかという事でございます。花粉症の治療を大きく分けまして、自分で出来る治療をセルフケアと言います。又、色んな薬剤を使ったりして行う治療をメディカルケアと申しますが、とにかくセルフケアが大事でございます。スギの花粉を吸わない事、それから自分の周りに在る花粉を取り除く事というのが大事でございます。

ひとつお見せ致しますが、こういったその様なスギ花粉の回避というのが大事であるという事は、鼻アレルギー診療ガイドラインにも載っております。こういったガイドラインは厚生労働省の肝いりで色々作っておる訳ですけども、私も執筆の委員でございまして、2005年度版には「花粉情報に注意なさい。それから飛散の多い時には外出を控えましょう。飛散の多い時には窓や戸を閉めておきましょう。又、飛散の多い時には外出時はマスク・メガネを使いましょう。それから表面がけげげした毛織物などのコートの着用は避けましょう。それから帰った時には服や髪を良く払って、家の中に花粉を持ち込まない様にして家に帰りましょう。それから目を洗ったり、うがいをしたり鼻をかんで、花粉を落としましょう。それから掃除を励行しましょう。」という事が書かれております。

何と言っても花粉グッズと申しますのは、メガネとマスクでございます。例えばメガネをかける場合とかけない場合、これはかけない場合ですが、かける場合では目に入る花粉数を約3分の1まで落とす事が出来るという報告もございまして、メガネをかけるという事は非常に有効な手段です。それからマスクもあります。マスクと言いますと色んなマスクがありますが、私は昔の厚生省の時に「君、良いマスクとはどんなマスクか調べてみよ」と言われまして、調べてみた事がございまして。マスクですから花粉を取れないとマスクではありません。花粉が良く取れる、それから息がしやすい、清潔であるという条件です。

こちらのビデオで今やっていますが、これはガーゼのマスクですね。ガーゼのマスクの上にスギの花粉を落としました。こう言う風にポンポン、ポンポンはたきますと、スギの花粉が素通りしてこの様に下に流れますから、ガーゼマスクではスギの花粉というのはあまり取れない。一方、不織布のマスク、これは織っていないやつですね。不織布で出来たマスクの上に花粉を乗せまして、同じ様にはたきますと、この様に不織布では花粉が出てこないという事で、ガーゼよりもこちらの方で出来たマスクの方がより効果的であろうという事が分かります。

何でこの様に違うのかという事なのですが、これがガーゼのマスクですね、ここに黄色くスジコの様に見えるのがスギの花粉です。見えますかね、黄色いのが並んでいますけども、ガーゼのこの目よりもこのスギ花粉の方がずっと小さいですね。ところが、不織布のマスクと言いますと、繊維がこう、てんでばらばらに走っているという事で、花粉がこのてんでばらばらの繊維の所を通ってくる時に、ここに当たりますと、これでこう、スギの花粉が捕らえられるという事で、こちらのマスクの方が良いと言う事になります。

実際に色んなマスクが市販されていますけども、皆様方がどう言う風にして調べれば、それが調べられるかという事なのですが、シッカロールというのが薬局なんか売っていますね。赤ちゃんなんか家におられる方はシッカロールを良く使うだろうと思うんですが、シッカロールの大きさとスギの花粉、青いのがスギの花粉なのですが、これは染めて青くなっているんですが、こう言う風に大体同じ大きさなのですね。ですからシッカロールを買って来て、買って来

たマスクの上に乗せて先程私が実験しました様にポンポンたたいてやる、それで素通りしてくる様なマスクはろくなマスクではないという事が分かります。落ちないマスクが良いと。それから息のしやすさというのは、顔に実際買ってきたマスクをつけて頂いて、息をしてみる。しにくいマスクというのは、そのマスクがペコペコ、ペコペコしますから、それは息がしにくいという事で、息がしやすくて、こういったですね、実験で落ちない、花粉が落ちない、シッカロールが落ちないというマスクが良いマスクだという事になります。

それともう一つ注意しないといかんのが、マスクの付け方なのですね。この付け方だとう横つちよが空いていますね。ですから、ここからなんぼでも花粉が入ってくるという事になりまして、マスクは顔にぴったりと付けると言う事が大切。これは歯まで見えていますので、具合悪いという事になります。一方、こういった立体マスクですが、こちらを動かして見ましょうか。こう言う風に、最近流行の立体マスクというのは、この全然隙間が無いという事で、こういったマスクを付けて頂く、付け方をして頂くと、花粉が鼻の中、口の中に入ってこないという事になります。

どんなマスクが良いかにつきましては、後ほど言いますが、花粉曝露室というのを私が作りました。ここで色んな実験をやって、どういったマスクが良いか、また開発をやっているという事であります。

家の中にもたくさんの花粉があります。例えば換気扇でありますとか、布団に付いてきますし、洗濯物にも付いて参ります。どれぐらい花粉が家の中に在るかという事を、東京でひとつ試験をしてみました。東京の町田のマンションを借りまして、そこに住んでいる人に協力して頂きまして、2週間普段通りの生活をします。普段通りの生活をする前に私達が行って徹底的にそのマンションを掃除する訳ですね。2週間の間普通そこに住んでいる人たちがやる掃除をやってもらいました。そうしますと、全体、このマンション一つの中に6万3千個という膨大な花粉が残っていました。

6万3千個といえますと、大体3千人位の人が花粉症を発症する量ですので、こういった家の中で花粉を吸わない様に注意するという事が大切だという事が分かると思います。特にカーペットでありますとか、トイレマットとか、あるいは敷布団に多くあったという事でもあります。

さて、メディカルケアに行きたいと思えます。アレルギー性鼻炎用の抗アレルギー薬と致しましては、ここに示しました様に、化学伝達物質の遊離抑制薬あるいは受容体拮抗薬というのがございます。主として最近で用いられているのは、第二世代抗ヒスタミン薬というのがよく用いられます。

又 Th2サイトカイン阻害薬でありますとか、ステロイド薬の局所用とか、あるいは経口用も使われる事があります。こういった治療方法をガイドラインに従いまして治療して行く訳ですけども、満足度を聞いてみますと、満足している人っていうのは4割位しか治療方法に対して満足していない。どちらでも無いでありますとか、不満又はやや不満、非常に不満を入れますと、半数以上の方が満足されていないという現実が分かります。

不満の理由としては効果が不十分であるとか、費用がかかるとか、通院が時間がかかるとか、副作用があると言った理由がござえます。患者さんは、効果が大きくてそれが持続して、効果が現れるのが早いという事を希望している様であります。そういった薬剤が、どの様な薬剤が良いかという事につきまして、私は有田の方にこういった花粉曝露室というのを作りました。ここに被験者の方に入って頂いて上から花粉を撒きまして、現れる症状と、薬剤を飲んでどの

様に効くかという事をする部屋であります。

こういった試験をやりますと、花粉シーズン以外でも試験が出来るという事と、雨が降っていて、花粉があまり飛ばない日でも出来るという事が非常なメリットでございます。ここではスギ花粉症の詳細な発症メカニズムを検討する事が出来ますし、花粉症に用いる薬剤を評価する事が出来ます。薬剤効果の違いでありますとか発現時間でありまして、どれぐらい持続して効くのかとか、あるいは効果、発現、メカニズムの違いでありますとか、個体差の問題も検討する事が出来ます。又、最近流行の機能性食品に対する評価も出来ますし、マスク、メガネ、空気清浄機がはたして花粉症に効くのかどうか、という事等も検討する事が出来ます。

これが実際の試験風景でありますけれども、退屈しない様に、これは花粉がいる部屋に皆さんが入って頂いているんですが、ビデオを見たりとかする事もやりまして、中でご飯を食べたりする事も出来ます。これは入室の前後に鼻の中をチェックしたりして検査をしている所です。抗ヒスタミン薬のA薬というのと、第二世代抗ヒスタミン薬のB薬というのを比較してみました。それとプラセボと言いまして、ビタミン剤を飲んだのを比較してみました。

横軸に時間を書いています。花粉を撒き始めますと、この様にビタミン剤を飲んでいるだけのグループというのは、くしゃみ発作、鼻汁、鼻閉にしましても、この様に上がって参ります。ところが第二世代抗ヒスタミン薬を飲んだグループというのは、この様に抑えられます。しかもこのA薬とB薬を比べた場合には、A薬の方がより強く抑えられていると言う事が分かりますから、このA薬の方が良く効く薬なのだと言う事が分かります。

目薬なのですけれども、目薬も非常によろしゅうございます。これが花粉を、曝露を浴びる前はこちらの方には第二世代抗ヒスタミン薬の点眼薬、こちらの方には人工涙液を一滴だけ入れました。そうしまして2時間曝露室におりますと、こちらの偽の方の人工涙液の方は真っ赤にこう、ただれていますけれども、こちらの目の、本物を入れた方は、ただれていないという事で、点眼薬も効くのだという事が分かります。

スギ花粉症というのは中々治りません。馬場先生なんかによりますと、スギ花粉症の人の2%位しか治らんぞ、一度発症するともう治らん病気なんだ、という事を言われていますし、私達の報告では約0.3%しか治らんぞ、という事を言っております。

それに対しまして、色んな療法が現在考えられつつあります。抗原特異的免疫療法と致しまして舌下免疫療法、アジュバント特異的免疫療法、これちょっと難しいので今日は説明致しませんけれども、こういったものが考えられつつあります。又、ヒト化抗IgE抗体、これは非常にスギ花粉症に使って良かったのですけれども、1シーズンを症状なしで過ごすには1人100万円かかるという事で、厚生労働省は中々認めてくれないという事です。

それからペプチド免疫療法というのもございます。この中で面白いのは、スギ花粉症を起こしてくるアレルゲンをお米の中に遺伝子導入をした症状緩和米というのがありまして、私達もずいぶんこれに興味を持っておったのですが、ちょっと厚生労働省と農林水産省の綱引きで現在止まっているという状況にあります。

私が興味を持っているのは、色んなばい菌で、予防したり治療できないかというのに興味を持って、現在研究を進めています。

これは舌下免疫療法。この様にパンくずの所にスギ花粉のエキスを入れまして、ここでこれを体の中に吸収させてアレルギーを治してやろうという療法であります。

花粉症に対する政府の取り組みと致しましては、環境省、農林水産省、文部省、厚生労働省、文部科学省とかいった所が色々な取り組みをしています。花粉及び花粉症の実態の把握、それから花粉飛散量の予測及び観測、スギ花粉の発生源の調査、それから花粉症の原因究明、病態解明、研究拠点の整備、それから予防・治療法の開発普及、それから花粉症対策品種の開発・普及、それから広葉樹林化など多様な森林づくりの推進、又花粉症に対する適切な医療の確保、という事で色々な事がやられていまして、私もこのメンバーにいくつか入っております。

面白いのは、紀の国森づくり基金事業というのは、先程司会の方から報告ありました様に、平成19年度から和歌山県で始まりました。森林環境の保全、及び森林と共生する文化の創造に関する施策と致しまして、紀の国の森と遊ぶ・学ぶ、それから紀の国の森をつくる・まもる、それから紀の国の森をいかす、という3つのテーマでやられている訳です。ところが紀の国と森と遊んだら、花粉症になったら困るやないかという意見もございます。そこで、お前はこういう事をやれと言われまして、森と共生出来る健康づくりをやれという事であります。

現在、花粉症対策研究会と致しましては、私、それから和歌山医大皮膚科の教授の古川先生、山田先生それから小児科の吉田先生、島津先生、それから聖マリの教授をやっております中川先生という専門家達を入れまして、こういった研究会、それから地元の小児科の先生、それから御坊の保健所長、それから県関係という事で、花粉症調査対策検討会と、こう言ったふたつの組織を作りまして、現在、研究を進めています。

どうい研究を進めているかと言いますと、花粉症の究極の治療というのは、花粉症になるのかどうかという事を予知して予防してやろうという事が究極の治療になるかと思えます。予知と致しましては、現在、遺伝学的な診断というのが日本で行われていますし、この研究が進んでくだろうと思えます。

アレルギーが発症するのかどうか、あるいは一度起こったのが何日かして重症化するのかどうか、それから、この人はどの様な薬剤が効くのか、あるいは治療の可能性についてという事の遺伝子診断というのが進んでくだろう、と言う風に思えます。又、私達が今やろうとしているのは、より詳細な発症要因の検討をしてやろうという事で、紀の国森づくり基金事業を利用致しまして、乳幼児を対象にした疫学調査を日高郡、御坊という所で現在行いつつあります。予防と致しましては、スギ花粉症とかアレルギーがなんで増えたかという事に関しましては、大気汚染でありますとか、スギの花が増えたからだとか、あるいは戦後の食生活が欧米風になったからと言う風な考え方がありますが、最も注目されているのが、私達が綺麗になりすぎて、色々なばい菌との接触機会が減ったから、こういうのが増えてきたんではなかろうかという考え方があります。

ここに示しました様に、非衛生的な環境におきましてはアレルギーになりやすい。それから日本の様に非常に衛生的で、抗生物質を使ったり、あるいは子供が少ない、あるいは予防接種をすると言う風な国では、アレルギーになりやすいと言う風な、たくさんの疫学研究というのがなされて来ている訳です。一番私達の体がばい菌と接触するのは腸でして、腸の中には約500種、100兆個、60kgの人で大体1kgから1.5kgのばい菌をお腹の中に抱えています。こういった様なばい菌が今の様に抗生物質で殺されたりして、接触する機会が減ったのでないかという考え方を私達が持っていますし、又腸内細菌で結構色々なアレルギーの症状というのが緩

和される訳です。

ですから先程言いました様に、日高郡、御坊を中心にして、乳幼児を対象にした疫学調査でより詳細に発症してくる要因を探るという事と、もう一つは妊婦さんとか、あるいは子供の時に、こういった腸内細菌を与える事によって、アレルギーになりにくい体にしてやろうと、こういう事を与えて、その後その子供達が飲まなかった子供と比べて、どう言う風にアレルギーの発症率が変わってくるのかという事を検討してやろうという事を、紀の国森づくり基金を利用致しまして現在検討している最中です。

こういった成果というのが出てくるには、しばらくまだ時間がかかりそうですけども、こういう事にする事によって、和歌山発の、例えばスギ花粉症、アトピー性皮膚炎、喘息を減らすと言う風な予防的な意味合いの仕事が出来る事によりまして、日本の医療費をより軽くしてやるという事まで結び付けていける仕事が出来たらという事を考えまして、私達がやっているという事をご報告致します。どうもご静聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

日本赤十字社和歌山医療センター耳鼻咽喉科部長、榎本雅夫先生でした。

今一度、皆様、盛大な拍手をお送りくださいませ。

ありがとうございました。

司会 続きまして基調講演に移らせて頂きます。

本日講師にお招き致しましたのは、フリーアナウンサーの青山佳世さんです。プロフィール少しご紹介させていただきます。

青山佳世さんは、フリーアナウンサーとして活躍されていらっしゃるしまして、NHKおはよう日本「季節の旅」に出演されたほか、全国800箇所以上の市町村を訪問なさいまして、地域づくりや森林など、幅広いテーマに取り組んでいらっしゃいます。また、林野庁林政審議会委員など数多くの委員を歴任されていらっしゃいます。

本日のテーマは、「森の恵みに感謝して」です。それでは皆さま、大きな拍手でお迎え頂きましょう。青山佳世さんです。どうぞ。

■ 基調講演

■「森の恵みに感謝して」

あおやま かよ
青山 佳世 氏

フリーアナウンサー



青山 どうも皆様こんにちは。今日は、和歌山にお招きを頂きまして、ありがとうございました。

先程は榎本先生から花粉症のお話を伺いまして、私も今日は薬を飲んでいまして、かろうじて何とか保っておりますけれども、大変参考になりました。花粉真っ盛りの和歌山にお招き頂きまして、誠にありがとうございます。絶妙なタイミングだったなと思います。

とかく東京などにおりますと、スギってどうもこう悪者扱いされてですね、スギは切れ切れみたいな風潮なんですけど、実は私は長年旅番組をやってきて、いろんな農山村を回っていますし、スギの産地にも数多く訪れているのですが、良く手入れされて、まっすぐに、すっくと伸びたスギの山って本当に美しいですね。

私達がよく見る、何かこう、ぼうぼうになったスギの山っていうのは、何となくあんまり美しくないのですが、さすがスギの産地に行くと山っていうのは綺麗だと思ってますし、それから私達が良く使う、こういった木の大切な資源となる重要な資源ですので、悪者扱いするだけの市民の意識というもね、これからようやく色々な国民運動の中で、間伐もしなくちゃいけないとか、色んな意識が高まってきて中で、やっぱりスギの木も大事よねっていう事を、やっぱり都会の人達にも言ってかなくちゃいけないな、と感じている所です。

私は愛知県生まれで、今東京にいる訳ですが、うちにも山はありませんし、周りにも山は無いので、それほど森林や林業と深い関わりを持ってきた訳ではありませんでした。最初は、木は切っちゃいけないとか、そう言う風に思ってきた人間の一人です。

でも、先程プロフィールでご紹介頂いたように、テレビの番組でそうした農山漁村を廻るうちに、やっぱり山に住んでいる方達から、色んな事を教わったのです。

それで、ある山に行った時に、まあひげのおじさんが、ひげのおじさんだと思ってください。私にとっておきの清水、湧水を案内してくれる事になったんです。そのひげのおじさんは、昔は林業で生活を営んでいた訳なのですが、林業が振るわなくなって、それだけで生活が出来なくなったので、民宿をしたり、それから都会の人達を山に案内するような仕事をせっせとやります。

ところで、皆さん達、多分和歌山にもとっておきの美味しい水ってあると思うのですが、そのとおきのおきの美味しい水を表現するのに何て言います？前の方、いかがでしょう。何と表現しますでしょうか？

甘いなら甘い、辛いなら辛い、硬いなら硬いって言えますけど、美味しい水って味が無いの

ですもんね。テレビの人間っていうのは、多分皆さん達もグルメ番組見ている、必ず一口飲んだり食べたりした時に、感想を言わなくちゃいけないじゃないですか。リポーターである私は、その湧水を案内してくれた時に、もう分かっている訳ですね、何か感想を言わなくちゃいけない。その時になんて言おうかなって頭を悩ましていた、それで、そのひげのおじさんが汲んでくれて、まあ飲んでくださいと言った訳ですね。

今、きっと皆さん達は何て言おうかなって考えていると思いますが、私はですね、ゴクッと飲んで、うーん、カルキの味のしない、まっさらな水だって言ったんです。カルキって塩素、消毒の事ですけど、何かポキャブラリーが少ないなと思いつつながら。

じゃあ、ひげのおじさんは何て言うだろうって思って、飲んでみて下さいますかって言って、したらひげのおじさんがゴクッと一口飲んだら、うーん、いつもはこの水は、のどにやわらかい水なんだけれども、今日はなんだか、ちょっと刺激があるな、ておっしゃるのです。ん？刺激って何だろうって思って私は飲んでみたんですが、それは分かりませんでした。

でも、その時に私は直感的なのですけど、あ、こうして山にいる人達がいつもこう山の顔を見たり、水の味を確かめたりしながら、その山の表情とか、こういった木を見守っているからこの山が活着しているんだなっていう事を、私すうっと感じたのですね。やっぱり山で暮らす事とか、山で生きる事の、その大事さをその時に教えてもらって、それ以降色んな取材をする度ごとに、そういった視点で山とか木を見てきました。ですので、そういう意味で私は色んな事を教わった山とか森に対する、今はご恩返しのもつり、そして私、今は山には住んでいませんけれども、都会の私達も何かが出来ることが無いかなと思って、森を眺めるようになってきました。

それで私も機会があるごとに、森のボランティアのような活動が盛んになってきましたので、山のお手伝いや自分の楽しみも兼ねてなんですけれども、行くようになってきた訳なのですね。

今日は森林環境税というテーマなのですけども、都会の私達が色んなボランティアを通して見た山の事、それから、みんなでどうやって森を支えていくか、作っていくか、活かしていくかという事の視点で、お話をさせて頂きたいと思っています。

それじゃあ、画面の方をお願いできますか。

私が学んだひとつの例で、実は関東でもちゃんと山があつて、林業家の方がいて、そして森林ボランティアと呼ばれる人達が活動をしています。

その中の一つが日本山岳会って山登りをする人達の集まりで、今までは山を楽しんだり、それから、ある時には汚したり自然を壊す事もあったかもしれませんが。その恩返しの為に、今度は森をつくる活動を始めましょう、という事で10年前から始めました。私の周りにはみんなそんな山登りをする人達、体育会系の人達が多かったですね。

彼らは本当に、急傾斜の山を登る事が大好きなものですから、いわゆる林業地帯と呼ばれる急な山を、色々間伐をしたりですね、それからそういう所で植樹をしたりする事が非常に楽しみだと言って嬉々として活動をしています。植樹だけじゃありませんで、チェーンソーとかの技術も学んで山づくりをしています。こうして彼らは、最初は少し手入れの行き届かなかった山の手入れをする、という事に楽しみを感じていた訳なんですけど、何も知らなかったこの人達は、こういった山に入って汗を流す事で、色んな事を学び始めました。

それはどんな事かと言うと、最初はともかく木が植わってない所や、それから荒れた所を綺麗にして木を植えて行きましょうと。木を植えていったらやっぱり間伐も、それから下草刈りもしなくちゃいけませんね。そういった活動を始めていった訳です。そうしましたら、じゃあ間伐をしたり下草を刈った時にに出てきた、そうした木、あるいは木くずとかですね、枝は、じゃあ山の中に放置しておくのか、ゴミになっていくんじゃないの？でもそれは、やっぱり活かして行かなくちゃいけないのじゃないのかな、という事に気が付く訳ですね。そしてまた間伐したとは言っても、ある程度ちゃんとした木もありますから、そういった木だって家とか、それから家具とか、ちょっとした事にでも使っていかなくっちゃいけないのじゃないのかって言う様な事も感じるようになった訳です。

だから、最初は植樹をしたり、それから間伐をしたりするような活動だけだったそのグループなのですけれども、その中から色々枝分かれをして行きまして、多分和歌山にもあると思いますけれども、地元の木で、そうした木の中で家を作っていくとか、あるいはバイオマスというのはご存知かと思いますが、そうした木くずなんかも、きちっと最後まで使っていくって、循環型の本当に自然の恵みを使い切っていくと言う様な活動に発展をして行く、その何も知らなかった一般の市民の人達のボランティア活動もどんどん、どんどん、こう進化して行ったのではないかなと言う風に思っています。

そんな中で私達がやっぱり感じる事は、普段山の中に住んでいなくたって、それはたまの休みだけかも知れないけれども、何かやれる事があるよね、自分に出来る事で良いから少しでもやって行きましょうという事で、関東の周辺のみんなも、色んな形で森づくりに参加をするようになってきました。それは先程ご紹介したような、まずは汗をかくというのまあ大事な事ですね。私、最初はですね森林ボランティアの人達を取材した時に何を期待したかと言ったら、荒れた森林を健全にしていく為の何かお手伝いができれば、とかですね、あるいは地球温暖化防止の為には、やっぱり僕達も何か動かなければならない、と言う様な何かこう、すごい高い志を望んで参加の皆さん達にインタビューをしていったのです。

ところがですね、聞く人、聞く人、森の中に入って木を切っていて、汗をかいてると気持ちが良いんだよね。作業をした後に、森の中が明るくなって綺麗になっていくのを見ると気持ちが良いんだよね。そんな話ばかりなんです。私達マスコミ的には何て言うか、意識論が欲しかったんですけど、そういう考え方をおっしゃる方はどなたもいらっしゃいませんでした。

その当時、10年ほど前ですので、どちらかという和林業とか山に関わる人達は、もう作業は大変で、なかなかお金にもならなくて、いやあ苦しい苦しいって、とても明るい話は聞けなかったのに、ボランティアで入っていく人達はどちらかと言うと、森での作業が楽しかったり、気持ち良かったり、そういった楽しみの為にやっているんだなっていう事が分かった訳ですね。そうした汗をかく事の結果が、山が少し綺麗になって行ったり、結果的に地球温暖化防止のほんのわずかなね、要素になって行ったりするのだからなっていう事を感じる事が出来ました。

そういったボランティアの活動も色んな人達が、最初はきわめて稀なって言ったら変ですかね、ある種こう意識の高い人か、非常に体育会系の人達だけだったのですけれども、最近行きますと若い女性の方達とか大学生の方達とか、色んな年齢層が増えてきて、入りやすくなってきているのかな、という気もしています。その主体も市民が中心だったり、NPOに発展していったり、そして和歌山でも多いと思いますが、企業の皆さん達が参加をして下さったりしてい

るような形にもなって来ています。そうした森を育てていく事に併せて、先程木を使っていく事、と言う様なお話もありました。

最近では僕達は木を伐ります、という事を謳い文句にしている地域もあります。たまたまこれは四万十川流域の皆さん達でしたけれども、もう大々的に僕達は木を伐ります、と謳い上げていらっしやいますね。たしかに、植えていくばっかじゃなくて、ある程度木を伐って、良い木は残し、そして使っていく事が、その森の健全な循環に繋がるっていう事を謳い上げているんだと思いますけれども、昔は当たり前のように木を使っていましたね。個人の家々が自分の山でも良いですし、地域の山で木を伐ってきて、それを薪にして使っていました。

東北の方、あるいは長野県でもそうです。和歌山はどうなんでしょうかね。薪文化の復活を唱える地域の人達がいらっしやいます。これも昔はそれぞれ自分の所で木を伐って乾かして、家の壁の所に積み上げて乾燥させて使っていたものですが、これをわざわざNPOなり、それからひとつの事業化としてやっていると、結構コストがかかって苦労しているという話も伺いましたけれど、でもそんな事も少しずつ、一人ひとりが自分で木を伐ってみたり、あるいは使っていく事が広がっていけば、これはまた復活できるのじゃないかな、と思います。

ペレットという使い方ももちろんありますよね。それから木質バイオマス、薪も木質バイオマスのひとつになるかもしれませんが、そういったその木質を使って発電をしましよとか、バイオエタノールにしましよとか、車の燃料ですね。それから熱源として使っていしましよとか、今色んな大きな研究開発が進んでいる訳なのですが、こういった施設を作る事は極めて大事な事ですけれども、山からどうやってその木くずなり、間伐材なりを集めて、要は効率的に集めて来るかとかね、それからそれを使ったは良いけど、それをどうやって一般の人達に使えるようにと言うか、普及をして行くようにしましよって意味で、そういう物もやっぱり市民の人達の意識を変えていかないと、中々施設を作っただけでは普及していかないって事で、こういう意味でも私達が何かを使ったり買ったり、それから、そういう家を作ったりする事で貢献して行く、という事が出来るように思います。

この地元の木で家を作る活動というのは、こちらはちょっと私存じ上げていませんけれども、各地の多くは、一つの活動としては、地元の木で家を作りたいと思う人は、まず山へ行って、この木で家を作ります。その木を伐った時に製材所へ行って、ここでこんな風に製材をして、その材料を作ります。そして今度は家を設計する独特の、あなたしかない家を作りますよって事で、もう一年位かけながら森林や環境の勉強をしながら、家を作っていく訳なんですけれども、そういった事で実際に木を使いながら、そして家を建てる人にも森の事や、それから林業の事なども、理解して頂きながらやっていくって、大変素晴らしい活動なのですね。

それで私達も彼らと話しをしているんだけど、まあ青山さん、あれから10年経ったのだけれども、うーん今年に19軒位かなって、やっぱり一生懸命やっているのだけれども、僕達のNPOだけではなかなか力及ばないな、と言う様な話も伺うようになりました。でも最近は今までの色々な行政などの働きかけもあり、また今、外材が安く入りにくくなっているという外的な要因もあり、これは林業の皆さん達は一番良くご存知だと思いますけれども、要は中国とか色々な所が経済発展をして木材を使う事が多くなったものですから、そこへ安い木とか高い木がそういった所へ流れていく為に、日本に安い外材が入りにくくなっている訳ですね。そういった事で、建材メーカーさんとか、住宅メーカーさん達は国産材に目を向け始めたという事なのです。

それで今、色々な所で家なり、そうした木材の資源を国産の中から調達しようという動きが、極めて積極的に進められるようになって来ました。だけど、中々そういった大きな需要に答えるだけの体制が出来ていないものですから、少しずつは動いているんですけども、中々上手くいっていないと言う様なお話も伺いますね。

ある住宅メーカーさんが全国各地に行き、木材の資源をどうやって集めようか、という事を相談に行った時に、中々地元でそれだけのまとまった量を出してくれないと。ある地域だけ、じゃあやりましょう、という事で受けてくれたという事で、その住宅メーカーさんは、ある地域の森林組合さん達と協力をして積極的にやっているの、その地域は林業経営的に大変成り立っているというお話も伺いましたけれども、そういう意味で経済的に成り立っていく可能性もある訳ですので、大きな消費に繋がるのはそうした経済的に成り立っていくレベルで、是非努力をして頂きたいなと思います。

ただ、だけどみんながみんな、もう昔のように、どこもかしこも経済的にまわって行くとは限りませんのでね、そういった部分を、やっぱりみんなの力でみんなが恩恵を得るような、そういった森の使い方とか、木の使い方を考えていかななくちゃいけないのじゃないかな、と感じています。

私のように色々な人達にその森の現状やなんかを訴えて行く活動をするっていう事も、私には出来る事ですね。そしてもうひとつは緑の募金ですとか、それから今、地域、地域で盛んに行われて来ています、森林環境税と呼ばれている、いわゆるお金で負担をして、そして森づくりに参加をして行く、またこの森林環境税は後ほどのフォーラムでも出て参りますけれども、お金を住民として出すだけではなくて、実際に活動し、行動をして行く事で森につくって行くという事で大変意味のある事だなと言う風に思っています。

さあそれでは、ちょっと具体的にこんな活動をしているという事でご紹介をさせて頂きたいと思いますが、和歌山にはなじみがあるかどうか分かりませんが、新潟県の佐渡市、佐渡島ですね。ここは実はですね、小さな島の中に100位の地域、それぞれお祭りの時期になると、おんでこ、鬼太鼓と呼ばれて神社に奉納する習慣が今でも残っています。この太鼓とその鬼の面をかぶって、神社に奉納する習慣が残っています。また色々な伝統が残っていて、各地にかなりの数、能舞台があります。さらにここにはですね、世界的に活動をしていらっしゃる鼓童、太鼓の鼓にわらべと書いた太鼓のパフォーマンス集団がいる訳ですね。

この人達は自分達も太鼓を演奏するんだけど、木の文化とか、日本の文化を地域の人や全国の人達に伝えていこう、という活動もしている訳です。それで、これ日本でもう最後と言われるかもしれないケヤキの木で作った和太鼓、右側の写真ですけども、そうしたものを子供達に解放して、実際に叩いて見せたり、木の穴からボーンと叩いた時にヒューと風が出て来る、そんな事を体験させてみたり、それからこの左手、鼓童の稽古場の周りは自然な林が広がっているんですが、そこに多くの人達を招いて、地元の、ここの中から取った横笛を使って演奏を試みたり、演奏するだけではなくて、その時にはさりげなく、木の恵みについてきちっとした、まあ言ってみれば森林環境教育なるものを、ごく分かりやすい形で紹介をしています。

それともう一つは、この右側のベンチなんですけど、これは佐渡の地元の材で作ったベンチと机なんです。これは佐渡市と鼓童が一緒になって作り上げた物です。実は私は佐渡に観光の目的で視察にお邪魔した時に、佐渡の玄関にあたる佐渡汽船の乗り場にこうした木のベン

チが置いてあって、これは佐渡の木で作ったベンチですって書いてあったんですね。それを見た時に、ああ佐渡市と鼓童はこんな活動をしているんだなっていう事を、森とか木に対してものすごく意識が高いんだなっていう事を非常に感じた訳ですね。

それで、じゃあそれは市と鼓童だけの問題にしないで、先程おんでこが佐渡の中に100いくつあるっていう話をしたじゃないですか。そうやって木に関わる皆さん達があれだけ大勢いらっしやるのであるならば、みんなを巻き込んだ何かが出来ないかなっていう事で呼びかけましたら、皆さんなぜか賛同してくださいまして、是非佐渡で和太鼓が作れるような森をつくりましょうという事になったんです。

でも、この和太鼓が作れるケヤキの木が育つ為には、300年以上かかるという大変大きな話なんですけれども、でも、いや300年だって良いんだと、それだけじゃなくて例えば太鼓のバチとか、それからおんでこの面とか、それから能舞台の木とか、そういったものだったらもっと早いうちに出来るだろう、という話になって、それで去年ようやくですね、もう間伐しなくちゃいけない所の木を間伐した所に、そうしたケヤキの木だとかバチになるような木を植えて行きました。まだ始まったばかりですので、これからこの森をどうやって使っていくとか、それからここをどういう環境教育の場にしていくかというのは、これからの課題なんですけれども、一つ私はやって良かったなと思う事があるんです。それは各集落におんでこがあるでしょ、そのおんでこの担当者が、実は僕達の太鼓のバチとか、それから作った太鼓っていうのは、元々は自分の集落の裏山から取ってきた木から作ってたんだと。今回はこの一箇所での鬼太鼓の森づくり、これ木の文化を支える森づくりとまあ称しているんですが、その鬼太鼓の森をつくる事になったんだけど、本当は自分達それぞれの裏山を何とかしなくちゃいけないよね、という事を言い出したんです。

これで私はもうしめたっと思ひまして、これはまだまだこれからなんですけれども、こうした大きなシンボリックな森づくり、しかもただ何かこう地球環境の為にとか、それから国土保全の為にという非常に大きな目的もさる事ながら、やっぱりいずれ自分達の子孫の太鼓になるのかな、バチで使えるなっていう、夢とか楽しさとか希望とか、そんなものを付け加えながら、森づくりをしていった方が一般の私達は参加しやすいし、長くこういった作業に関われるのではないかなという気がしていて、こういう目的作りというか、目標作りっていうのは大事ななっていうのを感じた一つの森づくりでした。

それからもう一つは、これはトラック野郎の恩返しって、トラック野郎なんて言うと怒られちゃうかもしれませんが、要はトラック事業者の皆さん達ていらっしやるじゃないですか。普段はまあ、言ってみればトラックを使ってる訳で地球環境に負荷を与えて生業となさっている訳ですよ。

それである時にトラック事業者が集まる全国大会というのがあって、千何百人のトラック事業者の社長さん方が、お集まりになっていた訳です。その時に、いや色んなガソリン税がとかね、CO2とかノックスに対するいろんな規制が厳しくて僕達の事業は大変だ、大変だと嘆かれる訳なんです。

その時に私が、いやまあ確かにそういった大変な事情はよく分かりますけれども、でも例えば普段は地球温暖化防止という事に、負荷を与えながら生業としている訳ですから、たまにはそういった事の恩返しもしながら、やるべき事もやりながら大変な事は大変だと訴えてください

よ、そうすれば国民の理解も得られるかもしれませんね。と言う様な事をそこで申し上げた訳ですね。

その時一人か二人から拍手が来て後はしら一つとしてたので、これはきつと無理なのかなって思っていましたら、その翌年の事業者大会の時に担当者からですね、今年からトラックの森をつくる事にしました、というお話が来まして、それは本当ですかと、お金を出すだけじゃなくて、きちっと汗もかいてくださいねっていう事をお願いしながら、本当に皆さん達がそれをやる気があるんだったら私も是非応援しますっていう事で、毎年このトラックの森の植樹祭には参加をさせて頂く事に致しました。

その全国大会で一箇所、一箇所増えて行くと共に、事業者の皆さん達は全国にいらっやって、各ブロック単位で活動もしていますので、ブロックでの森づくりっていうのも、もう今十数箇所、増えています。ですので、まだまだその理解はね、こんな森つくってどうするんだい？という方もいらっやるのも事実なのですけれども、でもこういった事を少しずつやりながら、僕達もやるべき事はきちっとやって行きたいって言う様な事業者の方もいらっやって、大変心強く、これからは応援して行きたいなと言う風に思っております。

これは、先程この和歌山県でも多くの企業の皆さん達が森づくりに参加をして下さっているという事で、これもCSR、社会的にどういう責任を負うかという大変な企業の意識の高まりもあり、森づくりに参画をして下さるケースも非常に多いですね。それは資金的な援助だけではなくて、先程申し上げたような汗をかいて頂く事、それは労働力というよりも、職員の皆さんの意識改革になるのだと思うんですね。職員の人達はその地域に来て森づくりをする為に一日でも二日でも、そこでいて下さると、それだけでも、例えば宿泊代とか食事とかね、色んな事で地域に貢献する事もあるじゃないですか。それとそういう意味での色んな、これも森林教育で言うところちょっと堅いんですけども、その企業の人達の意識を変えたり、あるいは森林や林業に対する理解も進んでいく事になるんじゃないかな、と言う風に期待をしております。

そんな風にですね、一般市民の何も知らなかった人達が、一生懸命何か山の為に出来る事はないかなってやっているんですけども、どうしてもどちらかと言うと、そうやって活動できる場っていうのは、公的な森である事が多いんですね。

本当はその個人が持っていて、昔はね、それが一本の木がすごく売れるからっていう事で木を植えていった山なんだけれども、もうどうにもならんという事で、手入れもしない、また見向きもしなくなっちゃったと言う様な山が本当に問題なんですけれども、なかなかそういう所も手伝わして下さいと言う風に言っても、いや、これは大事な山だから君達のような素人には手を出させない、みたいな感じでやらして頂けないと言う様なお話を多く聞きました。じゃあ、そんな大切な山なら自分でやったら良いのと思うんですが、それもしない、という大変悩ましい状況がありまして、そこで何とかせねばならんというのが、やっぱり各自治体の大変な思いがあったという事もあって、そこを何とかする為にも、こういった森林環境税とかね、色んな形で、そうした公益的な機能を果たす為にもそういう個人の山を手入れをして行きましようとか、みんなで良い山に変えて行きましようと言う様な動きが全国に広がって行ったのではないかなと思っています。

みんなで支える森づくりの意味を、もう一度ちょっと振り返ってみたいと思いますが、こうやって機能とか水源かん養、国土の保全、地球温暖化防止と言う様な非常に大きな役割がある訳

ですが、それだけではなくて、もう森の中にいるだけで気持ちが良いじゃないですか。そりゃ広葉樹の森も良いし、花の咲く山の中もとっても心地良いですよ。それから先程も言いましたけれどもスギ林だって綺麗に手入れされた森の中っていうのは本当に心地が良い。それを例えば癒しとか健康とか、それからまあ観光的な資源として活用して行きましようと言う様な活かし方もある訳ですね。最近では森林セラピーと言う様な呼び方もある訳ですが、こういう活かし方をする時にも、やっぱりこれは単にその木を伐ったりなんかするだけじゃなくて、そこで案内をする人も地元の人でなくてはいけないし、殊に森林セラピーをする時には、山の中を歩くだけじゃなくて、食とかそれから周辺にある観光資源とか、歴史的資源とかそういったものを加味しながら、心の健康に繋げて行くと言う様な運動ですので、やっぱりその地元の皆さん達の全員の協力が無くては、こうした森を、こういった意味での活かし方っていうのが出来ない訳ですのでね、こういった所でも私達が出来ると言う事があるんじゃないかなと思っています。

それから、これはあらゆる面からの森林整備という事で、これは山側だけの話ではなくて、と言うか山の治山もあるし、それから砂防事業、山が崩れた時にどうするか。で、その山が崩れた時にまあ木を植えて行くんだけれども、その植えた木のそろそろ手入れをしなくちゃいけなくなって来ている訳ですね。その木をもう一度ちょっと間伐をしながら、もう少し花のある木とかそれから広葉樹の森に変えていくようなタイミングになるかもしれません。

それから川とか公園とか海、全部が森と関わってきますので、それは山側だけの話じゃなくて、まさに地域全体の問題で、みんなに森に目を向けて行くと言う事が大事になってきています。それから市民、市民と言う風に言っていますが、これは何て言ったら良いんでしょうかね、山の地域とそれから町場の人間との連携という事になります。

里山の整備においては、出来れば地元に住んでいる人達が本当の裏山を自分達も憩える様な山に行きたいねっていう事で、地域でその山の整備をして頂くのが良いんだと思うんですが、今は山に住む人達も大変少なくなりましたので、町場の人達と、どうしても一緒になっていかなくてははいけません。さらに山の人達っていうのは、私、佐渡でやった時もそうだったんですけど、山に近ければ近いほど、ボランティアで山の手入れをするっていう気持ちに中々ならないんです。「いやこれはもうお金にもならんし、何の為にやるんだね？」と言う様に言われる訳ですね。それで「でもご自分達の木の文化で」て事で「あーそうだな」と言う風に初めて言って頂けたんですけど、でも周りに山の無い都会の人達にしてみれば、やあ、この荒れた山は何とかせねばとかね、それから例えば地球温暖化防止に繋がるんだったら何とか貢献したい、と思うような事で動ける人間が、本当に山の様にいる訳ですね。

だからそういう人達と連携をしながら、やっぱり森を支えて行かなければいけないという事と、それからもう一つは、本当の大都会と森林圏との関係であるんですが、最近色んな地域を守っていると、森林圏と呼ばれる地域の中の山側の方と町場の方の、意識がとても離れているんだという事に気が付きました。要はその森林圏にいながらにしても、森林とか林業にほとんど関心が無いという方が多いというお話を伺うにつけ、そういう意味では大きな山と都会の連携と共に、森林圏の中での意識を山に向けさせると言う様な、そうした活動は更に重要になって来るのかなと思っていて、こういう意味でも、みんなで支える森のお金がこういった所にも使われると良いな、と言う風に感じております。まさに森林圏の中の町場の人と山側の人との連携というのは、この趣旨に合っているんですよ、と思ってお話をさせて頂きました。

色々な形で私達一般住民が森づくりに関われる事、担い手には中々なれないかも知れませんが、その中の一人は、ひょっとしたら森林後継者になるかもしれませんね。色々な形で森づくりに携わっていただける事があると思いますので、皆さんから集めた貴重な基金を大切に使いながら、この美しい紀の国の森を次の世代へ繋いで行きたいなと思います。

またこれから具体的なお話はパネルディスカッションの方で行われると思いますので、そんな中でも皆さん達が実際にどんな形で森づくりに参加をなさっておられるのか、私も勉強しながらその活動を全国に発信して行きたいなと思っております。

丁度頂きました時間が参りましたので、私のお話はこの辺で終らせて頂きたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。青山さんにお話を頂きました。

森の現状、課題、そして活動を通して一つの取り組みが大きな広がりを見せたというお話、それから森づくりをキーワードにして、様々な可能性があると言う風な夢のあるお話をお伺い致しました。ありがとうございました。今一度盛大な拍手をお送りくださいませ。

なお、青山さんはこのあとのパネルディスカッションにもお加わり頂きます。是非お楽しみになさってください。

さて、この後はパネルディスカッションをご覧頂きますが、準備が整いますまで、しばらくご休憩を頂きます。5分ほど休憩を頂きまして、午後2時35分位から始めさせて頂きたいと思っております。また会場出口にアンケート用紙の記入頂ける場所を設置しておりますので、鉛筆も用意してございますので、是非ご利用頂きたいと思っております。なお、お席をお離れになる場合は貴重品等、各自でお持ち下さいます様、お願い申し上げます。それでは、一旦休憩とさせて頂きます。

■ パネルディスカッション

■「県民一体となった和歌山らしい森づくりを目指して」

コーディネーター 橋本 卓爾 氏（紀の国森づくり基金運営委員会委員長）

パネラー 青山 佳世 氏（基調講演者）

上野 大雄 氏（岩出市立中央小学校教諭）

白水 節二 氏（色川地域振興推進委員会）

野村 義夫 氏（紀州林業懇話会）

原見 知子 氏（ゆめ倶楽部21）

司会 皆様お待たせ致しました。それではただ今よりパネルディスカッションを始めさせていただきます。本日パネリストには様々な分野でご活躍の皆様にお越し頂いております。本日のテーマは「県民一体となった和歌山らしい森づくりを目指して」です。

さあ、それではパネリストの皆様方をご紹介致します。どうぞ皆様拍手でお迎え頂きたいと思います。

まずは、ゆめ倶楽部21の原見知子様です。

紀州林業懇話会の野村義夫様です。

色川地域振興推進委員会の白水節二様です。

岩出市立中央小学校教諭の上野大雄様です。

そして先程ご講演を頂きましたフリーアナウンサーの青山佳世様です。

そしてコーディネーターは紀の国森づくり基金運営委員会委員長の橋本卓爾様にお願いしております。

それでは橋本委員長よろしくお願い致します。

橋本 どうも皆さんこんにちは。

本日のパネルディスカッションのコーディネーターをさせていただきます橋本でございます。よろしくお願い申し上げます。

私は、簡単に自己紹介をさせていただきますと、現職は和歌山大学経済学部で教員をしておりますが、縁がありましてこの紀の国森づくり基金の関係の仕事をして頂いております。紀の国森づくり基金運営委員会というのがございまして、その委員長を勤めさせ

て頂いておりますが、この委員会の名前をお聞きになった方もいらっしゃると思いますが、あまりご存じない方もいらっしゃると思いますのでちょっとだけご紹介します。ご案内の様に紀の国森づくり税というのが導入をされました。19年度からスタートしておりますけれども、それに伴いまして、この税収を基金にしてそれを活用して行こうという事で、紀の国森づくり基金というのが設置されております。そしてその基金を森づくり税の趣旨、森づくりの趣旨と言いますと、森林環境の保全と森林と共生する文化の創造とちょっと難しい言葉でありますけれども、もう少し分かりやすく言いますと、森とあそぶ、森と森にまなぶ、森をつくる、森をまもる、とこういう事に、適正かつ効果的に貴重な県民の皆様の税金が使われる様に、色々と調査を、審議をする委員会がございます。その委員長という事でございますので非常に身の引き締まる思いをしておりますけれども、出来るだけ県民の皆様のご期待に添う様に色々と厳しく適正に調査・審議をしていきたいと思っております。その結果を知事に答申をして行くという、こういう機関でございます。

それでは、これからパネルディスカッションを始めたいと思っておりますけれども、本日のパネルディスカッションの目的とか狙い、それと進め方につきまして簡単に説明させて頂きたいと思っております。ご案内の様に、先程ご紹介致しました19年度から和歌山県では紀の国森づくり税というのが導入されました。その税収を基金にしまして和歌山の森林整備に活かして行くという事で、すでに事業が始まっております。

もうすでに約1年間を経過致しまして、今日はこの1年間の様々な活動をふまえて、これから和歌山らしい森づくりをどう進めて行くのか、あるいはこの基金を適性かつ効果的に活用しながら、和歌山発の森づくりをどう進めて行くのか、こういう事につきましてパネラーの皆さん、そして会場の皆さんと一緒に考えて行くというのが本日のシンポジウム、パネルディスカッションの狙いでございます。

進め方はまず最初に19年度、本年度すでにこの事業を実施されております2団体の方から、本年度の取り組みについてご紹介を頂きます。それから、県内で林業のまさにリーダーとして様々な分野でご活躍頂いているお二人の方から、実際に林業に関係する中で色々と日頃お考えになっている事についてご報告頂き、そしてそれをふまえて青山さんから全国的な動きについて補足して頂くというのが最初のステージであります。これが1ステージであります。

それをふまえて第2のステージ、2番目の課題と致しましては、これから和歌山県でどの様にして森づくり基金を上手く活かして行くのか、和歌山らしい森づくりを進めて行くのかという事について、色々とご提案を頂こうと思っております。この事業は平成24年まで続きます。この間に、本当に県民の皆様の貴重な税金を、本当に和歌山らしい森づくりに活かして行くという事が大きな課題になっておりますので、これについてしっかりと、その方向性について色々と議論をして頂くというのが2番目の課題であります。

3番目は、時間が少なくなっておりますけれども、これから具体的にどうやったら良いかというご提言を、それぞれパネラーの皆さん、あるいは青山さんの方から頂こうと思っております。そういう事で限られた時間ではございますけれども、実りあるシンポ

ジウムにしたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

それでは早速でございますけれども第1ステージから進めさせていただきます。

まず最初は19年度この森づくり基金を使って事業をして頂いております2団体の方から事業概要についてご説明頂きますけれども、まず上野さんご説明をよろしくお願い致します。

上野 失礼します。岩出市立中央小学校に勤務しています上野と言いますよろしくお願い致します。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、岩出市というのは和歌山の北部に位置して、関西空港にもすごく近いところです。人口も5万人を超えて一昨年単独で市になりました。私も小さい時からそこにずっと住んでいる岩出町民から岩出市民になった1人です。

どういう町かと言いますと、勝手に言っているんですけども、半都市・半田舎という感じで、道路が整備され、マクドナルドとかケンタッキー、昔は人口比率でいうとパチンコ屋さんが一番多いと言われた事もある、かなり都会化しているのですが、その中のいたる所にのどかな田園風景が横たわっているという風な都市です。

また、紀の川平野に位置していますが、北も南も山に囲まれている、意外と山に囲まれているのに山・森林には縁のない、先程青山さんの話にありました様な、町の方の都市になると思います。

その中で岩出市内には6校の小学校があります。そのうち4校、岩出小学校、根来小学校、山崎北小学校、そして私が勤務しています中央小学校が紀の国森づくり基金活用事業に応募して、その中で「岩出市内小学生ほんまもんの森林を学ぶ事業」として森林体験を行いました。

4校のうち3校は授業時間を利用して児童と教職員だけの参加でしたが、本校はPTA組織、うちの学校では育友会と呼んでいるのですが、その組織と学校が連携しまして生涯学習の一環として参加させて頂きました。参加させて頂いた日も12月1日の土曜日という事で、休日を利用して頂きました。今日も来てくれているんですけども、うちの安居校長が中心になって、うちの学校は生涯学習にとっても力を入れています。科学的な土曜おもしろ教室、お花教室、お茶教室、囲碁教室、料理教室と言う風に子供達が色々な体験を通して生きる力を習得して行く様な、そういう風な学校づくり又は保護者との連携を目指しています。

今回の授業も放課後子供プランの1つとして文部科学省から今、推進されている事業のひとつなのですが、それと提携しまして12月1日の日に児童・保護者・教職員合わせて206名で日高川町及び高野町にて貴重な体験をさせて頂きました。

体験の内容としましては森林・林業従事者の方から「ほんまもんの話」を聞く、間伐体験など「ほんまもんの森林体験」を実際に行う、森林から生み出される恵みを利用した「ほんまもんの製作体験」を行う。「ほんまもんの紀州材」を用いた事後学習を行うと言う風に、この「ほんまもん」という言葉については実際学習を行う上では本やビデオ

教材、インターネットとか言う風な、言うなればバーチャルな物が多いのですが、そうじゃなくて実際の体験を通して自然のやさしさ、厳しさを学んでほしいという意味を込めています。

続きまして日高川町に実際に行かせて頂いたんですけれども、今、目の前に原見林業の原見会長がいらっしゃいますが、隣に奥様がいらっしゃいますが、ゆめ倶楽部21の皆様のお世話になって色々な貴重な体験をさせて頂きました。簡単に活動の中身を説明させて頂きます。まず間伐体験、午前と午後にたくさんの人数が参加したので、一度には行えないという事で午前と午後に分かれまして間伐の体験を行いました。

間伐というもの、僕も実際町育ち、ちょっと偉そうな言い方ですけども、町育ちなもので分からなかったのですが、行くバスの中でお家の方から「山の木を伐るっていうのは先生環境破壊と違うんですか？山の木を伐るっていうのは悪い事でしょ？」って、なまじその環境教育で森林破壊の事を勉強しているのでそういう風なイメージばかりが先行して、でも間伐って体験してみたら分かるん違うかなって言って、実際に体験してやはり良く分かりました。木を伐る事によって逆に森が生き活きして行くっていう事はこういう意味なんだなという事。実際に自然を目の当たりにして、周りを見渡してやらせて頂いたので、すごく分かりました。その時には原見林業の方が一緒にインストラクターという形で教えて頂いたのですけれども、僕達教師というのは時間の中で生活しているもので、子供が戸惑ったりもたまたましていると思わず指示をしてしまったり、手を貸してしまったりしてしまうんですけども、じっと待ちの姿勢で、子供がウンウン言いながら伐っていて、これ本当に切れるんかなと思うものも、じっと待ってくれるんですね。子供がやり終わった瞬間に汗をぬぐいながら、出来たっ！てこう言う風な、何て言うのかな、山の中にある山との一体感、時間の穏やかな流れ、それがもうすごくありがたかったです。その後ここで伐らせて頂いた間伐材を学校へ持って帰った事は、また後で報告させてもらいます。

僕が参加したのは日高川町と高野町に分かれた方の日高川の方に参加させて頂いたのですけれども、その後、午後、または午前の部も含めてなんですけども、色々な森の恵みを使った製作体験をさせて頂きました。クリスマスリースや竹細工、木工ミニ門松、これは門松に石を入れている所がさっき映っていたと思います。川原まで下りて行って子供達が石を入れました。僕が参加したのはウッドバーニングに参加させて頂いたのですけれども、本当に日頃ぺちゃくちゃぺちゃくちゃ喋って席を立ち歩く子供達がじっと木を見つめて、木の焼ける良い匂いがするんですよね、そんな中で過ごさせてもらいました。かずらでも色んなかごを作らせてもらいました。

高野町コースの方は、うちは橋教頭が中心になって行って来てくれたのですが、高野山事業森林組合及び高野山森林公園インストラクターの会の皆さんにお世話になりました。これが高野山での間伐の体験です。木材の価格についても教えて頂いた様です。

さて12月1日の森林現地体験をこうして終わった訳ですが、子供達が伐採してきた間伐材は、後日ゆめ倶楽部21及び森林組合の方に材を出材してもらい学校に届けてもらいました。中央小学校では授業時間とかちあったので私が1人で受け取ったのですが、記念写真も恥ずかしくて撮ったのですけれども、ここには採用されていないんですけれ

ども、私だけが受け取りました。

他の学校では、これは岩出小学校と向かって左が岩出小学校、右側が山崎北小学校なんです。子供達がもう大喜びで自分達が切った木、ちょっとおまけはしてもらっていると思うんですけども、大喜びで受け取りました。これらの間伐材を使って各小学校が活用方法を考えました。中央小学校では参加人数が多かったという事で、それを1つのものにまとめて行くという作業がとても困難だったので、子供達が図工の時間を利用してルームプレートを作成しました。

そこにもあるのですが、現実にはこう言う風な、ちょっと宮本木工さんをお願いして作ってもらったのですけれども斜めに切らせて頂いて、それをサンドペーパーで一生懸命磨いてツルツルにして、そこに絵を描いてそこにニス塗って、この子はこの木の横の皮も気に入った様で皮をニスで固めて取れない様にしてありますし、またこんな風に皮をむいて自分の部屋の入り口に勉強中と、この子は秘密の部屋って言う風に子供達も大喜びする。で、これはニス塗ってもヒノキの良い香りがすごくするんです。大事な物なので、はい。作らせて頂きました。

他の学校を紹介させて頂きますと、岩出小学校や山崎北小学校ではプランターカバーを製作しました。根来小学校ではベンチを作りました。さて向かって右の写真なんです。何か作っているのですがこれは何でしょうか？という事なんです。

これは今回紹介させて頂いた子供達の森林体験の事例とは少し違うのですが、岩出市内の全ての公立の保育所及び小学校にこの人形が配置されています。名前も付いていて「紀の子と紀の男」という名前が付いています。男の子が紀の男で、女の子は紀の子です。これは同じく紀の国森づくり基金活用事業の補助を得て那賀木材共同組合が製作した物で、飛び出し注意などの啓発人形の試作品になっています。もちろん、うちの中央小学校にも置いてあります。子供達も、その愛くるしい顔と、意外としっかりした造りになっていますしバランスも良いので。最初置いた時には、いたずらされたりこけたりとかしないかな、と思ったんですけども、現在も元気に、元気と言うか、子供達の安全、交通安全を守ってくれています。参考までに紹介させて頂きます。

さて、今回の岩出市内小学生ほんまもんの森林を学ぶ事業に参加して頂いた保護者の方々の作文を一部紹介させて頂きたいと思います。これは4年生の保護者なんですけれども、「この度は森林体験教室に参加させて頂き、誠に有り難うございました。特に森林の間伐については大変貴重な体験をさせて頂いたと感謝しております。私が子供の頃は、山に登って遊ぶのはさほど珍しいことではなく、懐かしい思いで山道を歩いておりましたが、何メートルもある木を伐るのは伐採するのは初めての事。木が倒れる瞬間は、とても感動的で夢中になってしまいました。子供達にとっては、山に入る事自体が新鮮だったようで、椎茸を見つけては、大はしゃぎ、ドングリ探しにも大はしゃぎでした。」

5年生の保護者です。「森林教室に参加させて頂いて、税金の使われ方、林業には、若い方や女性の方も活躍されていること、アイターンして暮らす人々の方が、私達、和歌山に住む者より、中津の自然の魅力を深く理解している事を知りました。」

6年生の保護者です。「子供達だけで参加させましたが、帰ってきた子供達の「かずら工芸」で作ったカゴを見て、私もびっくりする程上手に出来ていました。そしてバスで

のこと、森林の伐採を自分で伐ったこと、楽しそうに話しているのを見て、子供の時に色々な体験・経験をし、自然に触れ合うことで、心豊かな子供に育ててくれたらいいなと思っています。」と言う風な感想を頂きました。実際に事務局をさせて頂いて、子供達の感想はもう、もちろんなんですけれども、保護者の方、親の感想っていうのが「童心にかえれた」とか「ゆったりした時間を過ごせた」そういう風な感謝の言葉をたくさん頂きました。

最後に事務局を担当させて頂いた自分自身の感想なんですけれども、とても良い仕事をさせて頂いたたなっていう感じです。岩出市で暮らしていると都会的な生活が日常であって、山に入る体験っていうか、それはある意味、非日常なんです。私達、私にとっては。でも、なのに、この体験に自分自身参加させて頂いて山に入ると、不思議な事に何か忘れていた様なやすらぎを思い出した様な気がしました。ふるさとが山にある様な、何か遺伝子かDNAかそのレベルで人間の体が覚えている様な安らぎがあって、あったかい気持ちになったのを覚えています。

最後になりましたが、ゆめ倶楽部21、高野事業森林組合及び高野山森林公園インストラクターの会、那賀木材共同組合の方々、そして事務的な事を色々支えて下さった岩出市の教育委員会の皆様、そして様々なサポートをして下さった那賀振興局林務課の皆様本当に厚く御礼申し上げたいと思います。中央小学校職員、そして保護者会、育友会になりかわって厚く御礼申し上げます。これで中央小学校の発表を終わらせて頂きます。

橋本 どうもありがとうございました。

非常にすばらしい活動報告でございまして、子供さんはもちろんでありますけれども、保護者の方にも非常に感動を与えたという事でありまして、関係者の1人として非常にうれしく思います。それでは続きまして、白水さんよろしくお願い致します。

白水 私は那智勝浦町の色川という所から参りました。場所的には那智の滝の一つ山後の南東斜面にある集落です。そして、ここの色川地域推進委員会というのは、申請しましたグループなんですけれども、1ターナー者の定住促進を中心にご存知、限界集落と言う様な危機感を持ちながら何とか村を維持して行くっていう事に努力する、それから活性を目指すという事に取り組んでいるグループです。

その中で今度、森づくり基金があるという事で、是非やってみたいなという事で参加申請致しました。先程、青山さんの話にもありましたけれども、まさに個人の山の問題というのが私達の壁でありまして、この話を頂いた時にも村の有力者の所に話を持って行く訳なんですけど、中々元々森林が主産業の村ですから、伐らしてくれとか、いじらしてくれ、それから広葉樹だとかブナ林だとかおまえらすぐ言うけれどもそういうんじゃないんだと、我々は朝早くから皆で苗木を運んで山に今まで植えて来たんだと。それを簡単に、私も1ターナー者なんですけれども、委ねていじらせる訳にはいかんと言う様

な壁がありまして、そうこうする中でお前達やりたかったら自分で土地を買えと言う様な事まで言われまして、そういう悩みの中で、ある人が、非常に協力的な方がありまして、わずか2ヘクタールなんですけれども土地を確保出来ました。

そういう中で始めたのがここに映っている所なんです。これからずっと上のほうまで、こちらに集落があるんですけれども、小学校・中学校があつて集落があるんですけれども、ずうっと緑で覆われたままの状態なんですね。今度初めてちょっと風穴が開いたと言う様な風景です。この伐った後にどうするかという事が、私達が森づくりの基金事業を使って、おまえらどうするって事を証明しなきゃいけないって事になっております。

これがその平地面の所なんですけれども左側が伐採している所です。伐って下さっているのはヘッドになってやって下さった緑の雇用なんかの担当されて、林業は40年近くやってらっしゃる方に指導して頂いています。この右側の方がその現在の状態ですね。まだ職人がちょっと一部ケヤキだとか植えている状態です。この後、今人が集まっている所に休憩小屋とかを作つて行こうと言う風な計画でおります。実は今年のメニューの中に入っていたんですけれども、実際に仕事を始められたのは11月からという事でちょっとスタートが遅れていたせいもあつて、今回は持ち越しという事になりました。

これはその木下さんという方なんですけれども、リーダーの方にせつかくの機会だからという事で新しい若い人にその伐採の仕方を指導して頂いているという、色んなこのロープワークだとか他の事についても色々そういう機会が多かったのが、この事業でとっても良かったと言う風に思っております。

彼も緑の雇用で私の村に定住してしまったという、今はもう森林組合からも外れましたけれども山の仕事を続けています。そういう人達が私達の村に数家族いまして、やはり緑の雇用は色んな批判もありますけれども、一つ若い層が入つて来たという事で評価出来るんじゃないかなと思っております。

これまさに左の写真はちょっといじった訳じゃなくて、あの位に真っ暗だったんです。そして緑の輪は何か草が入っている訳じゃなくて、わずかに矛先にあつた緑が落ちてあの緑が見えて来ただけで真っ黒な状態です。そしてわずかに、右の写真ですけれども光が差して今から生き返るだろうかという様な状態です。

これは上の方の木なんですけれども、かなり大きい木で動かすのは大変で、それなりに道具も無かつたんですけれども、自分の所にあつたウィンチだとか道具を工夫して木を寄せ集めているという状態です。

これは森の中の斜面が荒れ放題だった所を石垣を積んだりして遊歩道を確保した、右側の状態が確保した後です。

先程の小学校の事例発表もあるし、都市のこういう運動の場合にはかなり人が集まってくれるんですけれども、私達の所は人口自体も少ないもんで、それから海岸線から1時間位入らないと言う様な事もあつて、中々人集めに大変なんですけれど、毎回日曜日の作業にこうやってボランティア参加してくれる人も結構ありまして、左の写真はみんな歩道作りをしているんですね。木造の歩道作りをしているという事で。

右側はせつかくだからという事で、せつかくだからと言いますのは、頂上の所にウバメガシの林が結構あるんですね。それで炭焼きをやろうという事になって、今炭窯をこ

れこしらえているところです。後は炭窯ときのこ作り、それから観察小屋、散策道というのが今回の目標になっていましたので、その中の一つで、きのこを植菌している写真です。一部かなり大きくなったナラの木がありましたので、それを利用して植菌をして、現在は積み重ねてかぶせてあるところです。4種類ほどのきのこを植えました。

それからこちらは、大体こういうボランティア参加の時には何もきのこをお返しする訳にもいきませんし、ちょっとお汁でも作ってごまかしているという感じですね。結構皆さんこれが目標で来てくれる方もあったりして、やっております。このテーブルとかも、この後で出てきますけども伐った木を加工して、とりあえず使っているという状態です。

これはフィンランドのロゴソルという機械なんですけれども、こうやって、出来たら山で伐った木をそのまま捨てて新しく木を植えるだけじゃなくて、やっぱり木も活用したいという事でこれを導入しました。当初ここに応募する時に盛り込んだんですけども、中々こういう物をお金をあれする事は出来ないという事で、結局自分達のあれで出来たんですけども、県によっては愛知県の犬山市なんかでは、この機械はすごく良い物ですから、現地で製材出来て色んな活動が出来るという事で、行政で買って貸し出していると言う様な事もあります。あまり不満めいた事をいうと20年度も申請しておりますので査定に悪い影響を及ぼすといけませんので、とても良い機械です。

これ炭窯の小屋ですけども、これも全て先程のロゴソルで製材して自分らでボランティア参加で作っていった物です。中々立派でしょ？素人がやった割には。

これはつい2週間ほど前に火入れをした所です。現在もまだ火が付いているので結果が楽しみです。

もちろんこの看板もその製材機で作った木で作りました。それから、子供達が結構ちょちょこと、呼びもしないんだけど遊びに来る様になってまして、山の小学校なものですから、小学校、中学校あるんですけども生徒数が少ないもんですから、ちょぼちょぼとですけどもよく遊びに来てくれます。

最後ですけども、まだ色々時間的に余裕がなくて遊び道具が出来ていないんですけども、こういう滑車を付けるだけとか、丸太を置くだけで結構皆さん楽しんでくれているので、今後とも楽しい村にして行きたいなど、楽しい里山にして行きたいと言う風に思っております。簡単ですけど報告します。

橋本 どうもありがとうございました。

先程青山さんの話にもありました様に、個人の山という非常に難しい問題が横たわっている訳ですが、この個人の山という問題を上手くクリアして非常に素晴らしい森づくりを展開なさっている、森づくり以外にも色んな多面的な活動をなさっているという事例でございました。どうもありがとうございました。

それでは続きまして、紀州林業懇話会の野村さんの方から林業に携わっている立場から、和歌山県の山の現状や会の活動内容についてお話を頂きたいと思います。

よろしくお願ひします。

野村 こんにちは。ただ今紀州林業懇話会の野村と言う風にご紹介頂きましたので、私の所属している紀州林業懇話会について若干説明したいと思います。

紀州林業懇話会というのは、和歌山県内で山林をお持ちで比較的大規模と言うのですか、そういう方が大体50名程で会を組織しております。

今日ここでお話をさせて頂くのは、私も個人的に龍神村の方で代々と言うのですか、学校を卒業して約30年この道、林業をやっておりまして、その事について若干紹介したいと思います。

本日は「森林をまもり森林をいかす」というテーマである訳でございまして、私がまず強調したいのは、私達は少なくとも守って来たのでありますが、守る事はすなわち活かして頂くのが一番守る事である、要は木をどんどん使って下さいよと、先程青山さんからもご説明頂いた事の繰り返しになる訳ですが、そういう事をまず最初に申し上げたいと思います。

30年前に龍神村でスギやヒノキを植えて来たのですが、やや植えすぎたという反省はもちろんあります。育たない所まで、尾根の上まで植えたという、そういう反省はありますが、まさにその頃昭和55年、振り返りましたら木材の値段がピークで、現在、その時と比較しましたら、大体4分の1から5分の1の値段になっております。

分かりやすく説明すると、50年あるいは60年位の解約出来ない定期預金をしている様な物で、何と言うのですか、このままですと非常に苦しいなというのが現実でございます。

その中で何故こういう値段になったのか。外材が入って来たとか色んな諸々の事はございますが、まず非常に木離れが起こっていると言う事で、昔でしたら植えて10年位から間伐収入というのが得られた訳ですね。農業で利用されております杖とか、あるいは秋になりましたら稲刈りが終わった後の干す、私の所の方では「なるがけ」、「なる」と言いますが。ちょっと太くなりましたら足場丸太ですね、その辺でちょっと普請する時は木の足場丸太、現在はパイプになっておりますが。そう言う風にしまして、とにかく投資したものが割と短期間でどんどん回収されて行くと言う事がありましたが、現在ではもう、その途中の過程が全部だめになりましたものですから、先程申し上げました様に50年あるいは60年解約出来ない定期預金をしていると言う様な表現をさせて頂いております。

私も自分の商売の事を、皆さんの前でこっぴどくあかんあかんと言うのは非常に不本意でございまして、あまり言いたくないのですが、まず林業のおかれている現状、現在の現状と言うのですか、それを正直に申し上げると、そう言う事に尽きると思います

ところが一方ですね、今の日本の森林の資源というのは極めて蓄積が高くなって、と言うのは当然使われなくなったから高くなったと言う面もありますが、この戦後50年で約4倍にボリュームアップしております。この間25兆円の資金と約10億人の労力が投入されまして、わが国の歴史の中でも最も今森林資源が充実している時期にあると、色々な雑誌を読んでも書かれております。

ですから今の現状を一言で申し上げますと、よく言われます様に夜明け前の一番暗い時と言うのですか、私自身も「何かもうちょっと東の方に薄明かりも見えてきた様な、ちらほらと」そういう気があります。そういうのが今の林業の現状と言う事になるかと思えます。

最近使われない使われないと言いますが、住宅雑誌とか色々見ましても、若い人達が大規模に新築する時に天井の梁とかそういう所をわざと見せる様な建築様式とか、やっぱり本能的に木に親しみを持っているというのを感じてくれているのではないかというのも心強く思っております。

それから、私自身は人に木を使え使えと言う前にやはり自分で使わなければ、という思いももちろんありますので、昔は木がふんだんに手に入ると言う事もあります。家で薪ストーブなんか使っておりました。ちょっと年寄りもおりますもので、火の用心も若干悪いと言う事で、最近はペレットのストーブも使っておりますし、やはり今のこれだけの原油高と言うのですか、これは車に乗る人にとりましたら非常に出費がかさむ訳ですが、逆にペレットの燃料とか、バイオマスと言うのですかそういう面で見ましたら若干の追い風になっているのではないかと。私の所の日高地方ですね、非常にハウス園芸、農業の方ですが、盛んな地域ですが、この前からもハウスの中に今までは石油のボイラーがペレットに、これはあくまでも試験的な様でございますが、そういう風な物に変えようかと、そういう動きも見られる様になって参りました。

それから、会としてはまとまって皆さんにPRすると言う事も、今までそうなかった訳ですが、今日これから発表して頂く原見さんのご主人も私共の会のメンバーでございますので、メンバーの人達ではそういう風に積極的にですね、自分の山に町の人に来て頂くと、そういう会活動も続けております。

以上まず簡単ですが会の活動について、それから林業の現状について報告させていただきます。

橋本 非常に林業をめぐる現状は厳しいですけれども、少し明かりが見えて来た。かつてない森林資源が今蓄積されているという、ちょっとこう非常に展望のもとに話を頂きました。どうもありがとうございました。

それでは次に原見さんをお願いしたいと思いますけれども、原見さんは先程上野さんのご講演にもありました様に、旧中津村で素晴らしい林業経営をなさっております。各地の小学校・中学生などの山林体験・林業体験を積極的に受けると言う活動をなさっておりますし、山村振興で様々な活動をなさっております。その辺につきましてご報告をお願いしたいと思います。

原見 ゆめ倶楽部21の原見です。よろしくお願ひ致します。

私は、先程から色々上野さんとか野村さんの方からご紹介を受けてますが、日高川町、平成17年に美山村と川辺町と中津村が合併しまして出来ました日高川町という所に住

んでいるんですけども、家は皆さんのご紹介の通り、林業を細々とやっております。それで林業の方もあれなんですけれども、先程からゆめ倶楽部21という話がよく出てくるので少し説明させていただきます。

この会は平成14年に当時の中津村役場から田舎体験をしてもらって都会の人から体験料金をもらって、それでやって行こうじゃないかと、そのころ25名集められまして、それで何も分からずに集まって、どうしたもんかなって色々皆さんで考えたんですけども、講師先生を呼んで説明を受けたり、あるいは先進地を視察させてもらって、それでどうにかやって来ているんですが、一番今まで続けられてきた良かった点というのは、この会に7名1ターンの方がいるんです。

1ターンの方というのは村に目的を持って入って来て来てくれています。田舎暮らしがしたいと言う事が入って来てくれているので、どっぷり私みたいに、結婚して30年経つんですけども、もう田舎の良さなんてどこか町の便利さを求めていた者にとって、そういう方達の話は本当に目からうろこ状態で、それでその方が町に向けてどういうメニューを提供したら上手く行くかというアドバイスのもとにやって参りました。

それで、それ以外にどういう活動をしているかと言うと、平成15年から今日はこちらでコーディネーターされている橋本先生とそのゼミ生の皆さんに、地域交流っていう、地域交流と言うより地域発展のための研究、そういう風な名前のもとに来て頂いて、どの様にしたら良いかと言う事に色々アドバイスを頂きました。本年度からは県の田舎暮らし支援事業というの指定を受けまして、こちらの方も観光学科の先生5人と学生達の力を借りて今一生懸命頑張っています。元々のその田舎体験というのは60位色々体験してもらうメニューを持っています。それで約2,400人近く年間訪れてくれますが、ここ数年教育旅行と言って学校の修学旅行とか校外学習で来てくれる事が多くなりまして、最大で300人位一度に受けた事もあります。

そういう中で、町村合併がありまして中津地区だけではやっぱりだめだと言う事で、去年の7月の末に隣の合併した町村を合わせて大きくゆめ倶楽部を膨らまそうと言う事で、全町から会員を募集して今38名でやっております。この会員以外にインストラクターとして地域のお年寄りの方とか色々な技を持っている人も参加して貰っています。

それから中津地区というのは元々産品販売所という所がありまして、そこに家で食べきれない野菜や山菜、ビショコとかそういう物を持って行って販売してもらおうという所で、少し頑張ればおこずかい程度にはなるかなという、そういう風な勤勉でもないんですけども一生懸命働く地域だと思えます。

その人達の中で、こんにやくとか昔から伝わっているお味噌、あるいはかずらカゴとか、わらじ作りとか、そういうのをやってもらう事によって、私達もびっくりしたんですけども、地域のお年寄りはすごく協力的で元気いっぱいです。私達ゆめ倶楽部の会員はその事が何かすごく喜ばしい事じゃないかと言う風に思っています。それで、これからも人が住んで良かった町、人が住みたくなる町と言う事を目指して頑張っています。

それで、先程岩出市の体験の話が出ましたので、この事についてお話させて貰います。昨年10月から12月にかけて上野先生の方からご紹介ありました様に、岩出市と紀の川市から5校、間伐体験とそれから森からの恵み体験と言う事で半日間伐体験、半日

森の恵み体験、どう言う事をしたかと言うと、かずらカゴを作ったり、ウッドバーニング、クリスマスリースとか木工、押し花マグネット、竹細工、これらを学校の方にこういうのが出来ますよって事をお知らせして、各学校で選択して頂いて、そして実施しました。

かずらカゴってご存知かも知りませんが、山の中で取って来て根っこを綺麗にして丸く巻いて乾燥させておきます。体験の人が来てくださる何日か前に水に付けまして、やわらかくして当日使ってもらおうという形式になっています。

それからクリスマスリースは、この頃ちょうどクリスマスが近くて時期的にぴったりだったんだと思いますが、すごい沢山の人が来てくれて、インストラクターの方はもう本当に毎日かずら取りで、すごく一生懸命に追われていた様な感じがします。それは考え方によっては、それまでのかずらに覆われた地元の木が、かずらを取ってくれた事によってちょっとほっとしたな言う風な、木にとってすごくプラスになって、ああこういう取り組みっていうのは本当に小さな小さな目に見えない事かもしれませんが、良かったかなという風に思っています。

こう言うお話だとちょっと皆さんにどの程度通じるか分からないので、実は私も中央小学校から感想文を頂きまして、今日ご紹介させてもらおうと思って用意してきたら、先程先生の方から感想文で言われたので重複していないかと、ちょっとドッキリとしたんですけども、重複していませんでしたのでご報告させて頂きます。

まず5年生の男の子が3行だけ。「めったに出来ない事が出来たのですごくうれしかったです。木を倒す時とても楽しかったです。」これって他の感想文よりずっと短かったです。それで、えっ？楽しいって書いてくれてるけど本当だったのかなと心配したら、その後ろにお母さんの文が入っていました。「子供達で行き自分は参加しなかったのですが、帰って来るなり、「楽しかったなあ、自分で木を伐ったんやで、すごかったわ、あんまり経験出来ない事をしてうれしいわ」ととても喜んでいました。」この様に書いて下さっていて、私達は体験とかして、よく小学生とか中学生から感想文を頂くんですけども、こう言う風に文章に表れない感動っていうのがあるんだっていう事を初めて知らされて、すごく嬉しかったです。

それからもう一つだけご紹介します。「ほんまもんの森林を学ぶ。山良し、人良し、紀州木の国最高でした。間伐のため山に入りましたが、子供はドジョウを見付けたり木の実を拾ったりして、間伐そっちのけで遊んでいたのでも「木、伐りな」と怒っていると、係の方が「お母さん良いんですよ自然に触れさせてください。本物に触れさせてください。子供達の笑顔を見て下さい」と言われました。ついつい子供に指示ばかりしている自分に反省させられました。木工も親切に教えて下さり初めてでしたが子供と楽しく作る事が出来ました。本当だったら廃材になる様な自然の物を利用し、すばらしい知恵で1つの作品を作り上げすごいと感心させられました。和歌山に生まれ住んで本当に良かったっし誇りに思う1日でした。たくさんの子供達に体験をしてもらいたいと思います。」以上です。

橋本 文章に表れない感動があるという、その辺のくだり非常に感動致しましたけれども、本当に実際子供達を受け入れてみて非常に子供達が本当に感動している姿をご紹介頂きまして、本当にありがとうございました。

青山さん、以上4名の方のご報告を聞いて頂いて、何かお話をお願いしたいのですが。

青山 色々な立場の皆さん達が、本当に森を通じて色々な活動をしておられる話を伺えて、何かこちらも楽しくなってきましたけれど、中津村とそれから岩出の小学校の皆さん達、町場と山場の意識がやっぱり違っていたんだなと。山側でゆめ倶楽部の皆さん達が山や森の楽しみ方を本当に自然体で伝える山の中での努力をなさって来られて、きっと子供達にもそれが通じたんだろうなと思うし、それから岩出の校長先生とか上野先生始め他の小学校の先生方の中にも、その山での体験を学校でどう言う風に活かすかと、あの作品とっても素敵だったと思いますので、そういう皆さん達のコラボが活かされていたんだろうなと思いますので、是非これからも山と町が上手く連携をしながら基金が使われて行くと良いなと思いました。

それから、やっぱり私のイメージもそうなんですけど、和歌山県ってどうしても経済林が多くて、スギ林が多い訳ですが、逆にそうすると地域に住んでいる人達の親しみの場である憩いの場っていうのが逆に少なかったんだなと、白水さんのお話を伺って思いましたので、こういう部分の、地元の人達も森に親しめる様な機会が広がって行くと良いなと言う風に思いました。

そういう時に技術指導などで、まさに林業家の皆さん達のプロの力が生きる訳ですので、まさに本当に県民参加の森づくりなのかなと思いました。先程は小学校の話、中学校の話もありましたけれど、秋田県などでは幼稚園生を受け入れているって言う様な話もあって、やっぱり出来るだけ小さいうちから、そうした山の楽しさとか自然での体験みたいな事をやっている地域もありますので、そんな事も、もし出来るんだったら良いのかなと。

それから、ここは木を使うと言う事まで基金を使って出来ると言う事で、ある森林県に行きましたら、木を使うって言う事は経済的な活動をしている事を支援をするからそれはなんと言う事で、木を使う事は基金を使うって事は出来ないって言う所もあるんですね。

でも、私は森林整備もやっぱり木を使う事まで含めて循環だと思うので、和歌山県はそれが理解されていると言う事ですので、実際にもそういった所に使われていると言う風にも伺いましたが、そう言った時にはやってらっしゃるのかどうか分かりませんが、岡山県などはそうした基金を使って出来た製品などには焼印を入れて、これはその森林環境税で出来ていますって言う様な事を示していますので、こういった基金でこういった活動が出来ているって言う事を分かりやすく一般県民の人達に伝える様な工夫もね、あったら良いのかなと言う風に感じました。

橋本 貴重なアドバイスありがとうございました。

あつと言う間に時間が経過してきておりまして、本来でありますとぼちぼち締め段階に入っている様な時間ですが、ここで終わってしまったらせっかくのパネルディスカッションが駄目になりますので、もう少し皆様ご辛抱頂きたいと思いますが、次に第2ステージに入りたいと思います。

今、それぞれの取り組みをお話を頂いた訳ではありますが、これからどうするのかと。24年までこの森づくり事業というのは行われますし、和歌山らしいこの取り組みをどうこれから展開して行くのかと、これについてパネラーの皆様にお話頂きたいと思いますが、時間の関係でちょっと短縮形をお願いをしたいと思います。ただスピード違反にならない様に適当にその辺はお願いしたいと思いますが、こうしたら和歌山らしい事業が展開できる、是非私はこうしてみたいとかですね、それぞれの思いを短時間で話頂きたいと思いますので、今度は原見さんからお願いできますか。

原見 私もそのテーマに沿って色々考えてみたのですが、あまり良い答えが出て来なくて、今私が感じている事を少し話させ頂きます。

今、山間部で困っている事、それは、過疎による限界集落。それからせっかく得たのに収穫できない、獣害で収穫できない物。そしてほとんど手付かずの森林。これらがすごく問題になっていると思います。

この間ちょっとある所で森林ボランティアの方のお話を聞いたのですが、老夫婦が林業をしていてやっぱりちょっと大変だからボランティアで来て欲しいって行って行ったところ、林業のお手伝い以上にその方達が集落で生活するための色々な事が出来ないで、そちらの方を手伝う事が多かったという話をされました。その方はやっぱり森林を守る、山を守るイコール人をも守るんじゃないかという話をされまして、自分は色々な手助けをしてその人達はその分時間が空けば森林へ行ってもらえる、そのためにも普通の生活に密着した所の協力をしたいという話を聞きました。

そう言う風にやっぱり困っている所もあれば、逆に今、緑の雇用等で他府県から若い方が沢山入ってくれています。実はうちにも何人か入ってくれてまして、私がお嫁に来た頃は大体50過ぎのおじさん達が山で仕事している、というイメージだったんですけども、今は主人、息子入れて7人いるんですが平均年齢が34歳です。中に27歳の女の方がいます。実は、去年の末までもう1人女の方がいたのですが、お嫁に行ってしまうので今1人ですけども、充分男の人に負けない仕事をしてきています。だから、そういう中で少し山間部にも光が見えて来たのかなと言う風に、そういう面から思いました。

また私、女性林研っていう林研グループの女性部会に入っているのですが、その仲間に、ご主人とは緑の雇用の関係で、子供さん二人と熊野古道周辺に引っ越して来られました。「周りにお年寄りが多いので、私は即戦力みたいな形なんや」と言っているのですが、その人達がうちの近所のおじいちゃんやおばあちゃんね、口開く度に「この辺は何にも無いんや、不便なんや。」これしか言わないって言うんです。ところがその

彼女は「何を言ってるんや、日本だけじゃなくて世界に認められた世界遺産の中で生活しているんじゃない。て私はこう言う風にして励ましている」って言われました。やっぱりそう言う風に元気な地域を作るって言う事が、人それから森林を通じてすごい大事じゃないかなと思います。

緑の雇用だけでなく、やっぱり町の人に森づくり税の事を分かってもらうためにも、やはり実際に山に入ってきて欲しいと思います。写真や絵がどんだけ綺麗でも、においや空気は分かりません。入って来てくれて理解してくれる事によって、あ、なるほどこういうお金も必要かなって分かって貰えるのが一番の方策じゃないかなと、私はその様に考えています。

もうそれぐらいですけれども、また先程の続きで申し訳ないんですけれども、中央小学校の感想文の続きをちょっと抜粋して紹介させていただきます。あるお母さんがこんなに書いていました。短いんですけども。「いつも鼻水ずるずるしている子が、帰ってきてしばらく鼻水が止まっていたので森林の力のすごさを知りました。」と書かれていました。もう一例、「今回は子供達だけの参加でしたが、喜んで帰って来た我が子を見て良い体験だったんだなと思いました。森づくり税がどの様に使われているか不明な点もあったのですが、この様な使い方なら納める価値があると思います。」この様に書いてくれたので、自分の事の様にごくうれしく思いました。以上です。

橋本 ありがとうございます。私は時間の関係でコメントを避けますので、次、野村さんお願い出来ますか。

野村 皆さん何て言うんですが、本能的に循環型社会に戻らないかと言う事、感じておられると思うんです。ですから私自身の立場から言いますと、今まで欲と道連れと言いますか、経済活動として林業というものを営んで参りましたが、今日はこの会へ出席させて頂いて非常にありがたいなと感じていますのは、先程から子供達を山に案内してくれたりとか、色んな町の人を山に導いてくれたりと言う事が、非常に将来的な木のファンを作ってくれていると思う訳でありまして、そういう子供達が大きくなった時には必ず自分の家を建てる時に、少なくとも一本や二本の木は使って頂けるのではないかと、これが本当にありがたいなと思っております。

ですから誠に厚かましい訳ですが、その基金の活用策と言う事で申し上げるならば、例えば私もPTA活動とかもやっておりますが、学校へ行きますと今の校舎は本当に学校の中の木が使われている部分が少ない訳で、校舎っていうのは本来でしたら「木偏」に「交わる」という字を書いているのですが、これだったら誰か言いましたが「石編」に「交わる」にした方が良いんちゃうかと言う風な話もかつて聞かれた訳でありまして、そう言う意味でも学校なんかで、ちょっとこうリフォームと言うんですか、そういう事をする時には玄関だけでもスギの板を張るとか、ヒノキの木を張るとか、廊下でもそうですね、そういう事にも繋がってくればと思います。

もう一つ更に付け加えるならば、最近色々な食の安全と言う事が非常に意識され出しまして、本当に食べる物に皆さんがかなり注目が行く様になっております。ですから、例えばの話ですが、割り箸なんかにもですね、和歌山県のコンビニでくれる割り箸は、和歌山のスギの割り箸とか。ところがコンビニさんなんかは、もちろん日々コストで動いておりますから、当然和歌山の割り箸にすると、ものすごく出費になると、そういう所にこの基金を活用で出来ないかとか、色々な勝手な思いは沢山する訳ですが、そういう事もちらっと思ったりした次第でございます。

最後に、私自身が理想の山づくりと言うのですか、日々目指してありますのは、広葉樹とか針葉樹とかという区別無しに、いわゆる美しい森というのは、を目指している訳で、美しい森とは果たしてどういう森かと言うと、いわゆるゴミ一つ落ちていないと言うような、そういう表現では無くてですね、健全な、本当に間伐されて、何て言うんですか、間伐を繰り返しますと下草が入ってくる訳ですね、ご存知の様に。上を眺めると針葉樹であります、足元を見ると小さい灌木も入ってくると。そういう山が一番健全な山であると思えますし、そういうスギとかヒノキの木肌を見ますと、やはり人間と同じ様に少し赤みがかかっていると言うのですか、そういう山づくりをしたいなと目指しておりますので、今後ともよろしく願います。と言う意味は、どんどん木を使って下さいと言う事でよろしく願いたいと思います。

橋本 それでは白水さん、よろしく願います。

白水 先程も話ありましたがけれども、森に人が入って行く様な状態を作るとというのが、この紀の国森づくりの一番の使命だと思います。

出来るだけそういう森づくりをする事によって、例えば先程話がありましたけれども、私達の村ではかなり獣害に苦しんでおります。里までに木が、35年前後に植えられた木が迫って、かなり大きくなって、それをよく言われる事ですけども、隠れ蓑にしながら獣達が畑の作物を荒らすと言う様な状態です。

いずれにしろ、昔の様に薪炭の生活はもう無い訳ですから、山に入らなければいけない必然性もないものですから、何か色々な面で人が楽しく森に入って行ける様に努力して行きたいと思っています。

橋本 続いて上野さん、よろしく願います。

上野 今日は参加させて頂いて、このパネリストの中で一番森と縁のない所にいる自分を感じているのですが、だからこそ、今、逆に森がもっと身近にならないいけないんだな、と言う風に思います。

こう言う風な活動に参加させて頂く事が、小学校教育やその他の学校教育を通じて子供達に、小さい時にもっと森を身近に感じておくという事がすごく大事なんだと言う風に感じました。

それから前半の榎本先生のお話の中で、スギの木が悪者じゃないと言うお話ですか、うちの家族もアレルギーの子がいるのですけども、僕の部屋は汚いので僕は全然大丈夫なので、これからも掃除もあまりせんでも良いなと言う風に思いました(笑)。以上です。

橋本 ユニークなご発言ありがとうございました。それでは青山さんいかがでしょう。

青山 こういう市民の活動っていうのは、今、行政的にも積極的に増やして行こうと言う様な動きがある訳ですが、行政から言われてやった時っていうのは、どうしても何やったらいいの?とか、お金はどれぐらい出してくれるの?とかですね、中々継続しなかったり、前向きにやって行かなくて成功しないケースが多いんですね。よっぽど行政にユニークで柔軟でやる気のある人がいれば別なんですけれども。出来ればやっぱり住民の中からこんな事がやりたい、って言う様な事があって、行政が上手くサポートしてくれると、そしてこの基金がうまく使われる様になると良いなと思いました。

だけど、その森っていうのも本当に間口が広くて、実際に知らない私達って、どこから森の中に入って行ったら良いのか分からない様な事が多いんですね。ですので、今、先進的に取り組んでいる森林ボランティアのグループですとか、それからゆめ倶楽部の皆さん達始め、和歌山県内に沢山ある、そうしたグループの皆さん達が、一般の本当に手間隙かかる素人だと思うのですけれども、そういう人達が山の中に入って行ける様な、そうした機会を増やして頂きたいと思います。

そして、私は関東に居てすごい素敵な林業家の方達に、森の素晴らしさとか色々な楽しさを教わりました。ですので、是非林業家の方とそれから森林組合の皆さんとか、そういったプロの皆さん達も少々足手まといになるかもしれませんが、それは大きな森林・林業への応援団になるという事で、是非積極的にその素晴らしさと大切さと、それから今の課題も含めてお話頂く様な機会をその基金などを使って、作って頂けると嬉しいなと思いました

橋本 非常に貴重な、これからの方向についての示唆を頂きました。ありがとうございました。

せっかくの機会でございますので、あまり沢山の方からご質問を受ける訳にはいきませんが、会場の皆さんの方で青山さんのお話、あるいは本日のパネリストの皆さんのお話に対してご意見なりご質問がありましたら、2、3受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか?

ありがとうございました。それでは時間の関係で、もっともって本当は会場の皆さん

とパネラーの皆さんとのディスカッションをしたいのですが、この辺で終わりたいと思いますけれども、本日は非常に短い時間でございましたけれども、この一年間を通して、基金に基づく和歌山県の森づくりがどういう状況になっているのか、あるいはこれからどうしたら良いのかについて、色々ご報告がありました。

まだ一年目でございますので、まだまだ課題が山積をしておりますが、お聞きのようにこの一年間の経験を通して素晴らしい教訓があちこちで出て来ております。本当に先程のお話じゃないけれども、新しい良い風が吹き始めて来ていると、和歌山県の森づくりに芽が出始めて来ていると言う風に実感を致しました。

この芽をもっともっと大きく育てて立派な木に育てたいと思います。そのためには森づくり税の趣旨を充分県民の皆さんがご理解頂いて、県民一体となってこの事業を進めて行くと言う事が不可欠でございます。

一部の県民だけのものではなくて、県民全体がこの森づくり基金を充分に活用して、県民の財産であります、宝であります、和歌山県の森を守り育てて行くと言う事、これをもっともっと大きなうねりにして行きたい、運動にして行きたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します。どうも本日はありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。パネリストの皆様、そしてコーディネーターをして頂きました橋本委員長、本当にありがとうございました。今一度皆様盛大な拍手をお贈りくださいませ。ありがとうございました。

どうぞ皆様ご降壇くださいませ。ありがとうございました。

今日のシンポジウムで得た様々なご提言をお持ち帰り頂きまして、1人でも多くの皆様ふるさとの森に関して関心を持って頂きます様、お願いしたいと存じます。

以上で本日のプログラムは全て終了でございます。

また、皆様にご案内が一つございます。今日のテレビで撮影させて頂きました模様につきましては4月20日、日曜日の午前10時から10時30分まで「森林をまもり森林をいかす」と題しまして放送させて頂く予定でございます。4月20日、日曜日の午前10時から午前10時30分まで。そして再放送が4月25日、金曜日の午後7時30分から8時まで放送させて頂きます。4月25日、金曜日の午後7時30分から8時までは再放送となっております。是非ご覧くださいませ。

また、皆様お手元でお書き頂きましたアンケート用紙、出口の方に回収箱がございます。また机を用意しております、鉛筆も置いてございますので、どうぞご利用になってお書き下さいませ。お願い申し上げます。

それから、会場の中で発生致しましたゴミに関しましてはお持ち帰り下さいます様お願い申し上げます。

本日は長時間に渡りまして本当にありがとうございました。

お帰りの際には忘れ物など無い様にどうぞ気を付けてお帰り下さいませ。

本日は誠にありがとうございました。

■ 講演者・パネリスト プロフィール

えのもと ただお
● **榎本 雅夫** 氏

(日本赤十字社和歌山医療センター耳鼻咽喉科部長)
日本の花粉症研究の第一人者。
平成20年4月からは鳥取大学客員教授に就任。
NPO 法人日本健康増進支援機構理事長として
紀の国森づくり基金を活用し花粉症対策に取り
組んでいる。

はしもと たくじ
● **橋本 卓爾** 氏

(紀の国森づくり基金運営委員会委員長)
和歌山大学経済学部教授。
紀の国森づくり基金活用検討会座長として県民
の意見を聴取し、活用方法を検討。紀の国森づ
くり基金運営委員会設置後は委員長として基金
の使い方について審議を行っている。

しらみず せつじ
● **白水 節二** 氏

(色川地域振興推進委員会担当)
那智勝浦町在住。
平成19年度紀の国森づくり基金活用事業によ
り、荒廃した植林山を間伐し、広葉樹を植栽す
るなど、里山の再生に取り組んでいる。また、間
伐材は小屋やテーブル、椅子など必要なものへ
と現場で加工し利用している。

はらみ ともこ
● **原見 知子** 氏

(ゆめ倶楽部21 代表)
日高川町在住。
日高川町(旧中津村)を拠点に活動。多くの都会
の方々に自然体験を提供。基金事業でも都会
の子供達の間伐体験を受け入れるなど、地域
の魅力を最大限に生かした活動に取り組んでい
る。

あおやま かよ
● **青山 佳世** 氏

(フリーアナウンサー)
1985年からフリーアナウンサーとして活躍。NHK
おはよう日本「季節の旅」など出演。地域づくり
や森林など幅広い取材活動に取り組む一方、林
野庁「林政審議会委員」等数多くの委員を歴
任。
著書に「旅で見つけた宝物」文藝春秋

うえの だいゆう
● **上野 大雄** 氏

(岩出市立中央小学校教諭)
岩出市在住。
平成19年度紀の国森づくり基金活用事業によ
り、高野町・日高川町での親子参加の森林・林
業体験をPTA・保護者会と連携して企画。自分
達で伐採した間伐材を学校に持ち帰り、木材と
森林の関係などについて学習を実施。

のむら よしお
● **野村 義夫** 氏

(紀州林業懇話会 事務局長)
御坊市在住。
堀河屋林業株式会社代表取締役として、つねに
保育間伐などを実施し、健全な森林を育成。間
伐材を搬出するために山に作業道を積極的に
作るなど、森をまもり・森をいかす経営を実施。
平成11年度には、全国林業経営推奨行事にて
農林水産大臣賞を受賞。